

1955年の直浪遺跡

高田健一

Sukunami site in 1955

kenichi TAKATA

はじめに

鳥取市福部町の直浪遺跡は、鳥取砂丘内の遺跡として著名であり、これまで多数回の調査が行われてきた(図1)。その端緒となったのは、1955年の福部村教育委員会による発掘調査である。調査成果は、翌年に『直浪遺跡発掘調査報告(予報)』として刊行され(松田他1956)、遺跡の層序、石器に用いられた岩石の分析と産地、動植物遺体の同定などについて報じられた(以下『予報』と略)。このような自然科学分析の充実ぶりは、この時代の報告書としては珍しいが、それは、この調査に参加した鳥取県立科学博物館(当時。後に鳥取県立博物館)学芸員(山名巖氏:地質学、清末忠人氏:植物学)の専門性に寄るところが大きい。

出土した遺物は相当量に上ったと考えられるものの、報告書に掲載された遺物は、石器・石製品10点、縄文土器10点、弥生土器・土師器3点にとどまった。これら以外の遺物については、『予報』後の報告書において取り上げられることが企図されていたと思われるが、その機会が訪れないまま70年近い年月が経過してしまっただけである。

ところで、筆者は、2011年から2017年までの間、日本学術振興会科学研究費補助金などの助成を得て、直浪遺跡の発掘調査を行った(高田他2015、高田2018)。調査成果を検討、報告する中で、第1次調査の重要性を再認識したが、2014年と2016年の調査区で検出した掘削跡がまさに第1次調査のトレンチ跡と考えられたことから、自らの調査成果と既往の調査資料を総合的に見る必要を感じてきた。幸いにも鳥取県立博物館、鳥取市教育委員会関係者のご助言とご協力を得て、現状で把握できる第1次調査の出土遺物と関連資料を再整理する機会を得たので、ここで紹介し、

その考古学的意義について考えたい。

1 第1次調査の概要と出土遺物の行方

出土資料に関する記述の前に、『予報』が現在では入手困難な文献であることから、1955年に実施された第1次調査について、その概要を述べておこう。

直浪遺跡は、戦後まもない時期(1947年)の湯山池干拓工事に伴って土砂採取をしていたところ、土器や石器が出土したことでその存在が注目された。出土品が回収され、地元中学校における展示会や公民館主催の郷土史講座で取り上げられる中で、徐々に遺跡保護への機運が高まった。

1955年4月～5月にかけて、現状保存か、実態解明の発掘調査かという討議の様子が地元紙に報道されたことをきっかけに、遺跡が盗掘を受けるという事件が起こる。これに危機感を抱いた関係者は、現状保存に傾いていた方針を一転し、組織的な発掘調査・研究



図1. 直浪遺跡の位置とその周辺の遺跡.

¹ 鳥取大学地域学部 〒680-8551 鳥取市湖山町南4-101
Fac. of Regional Sciences, Tottori Univ., 4-101, Koyama-Minami, Tottori 680-8551, Japan
E-mail: takata@tottori-u.ac.jp
[受領 Received 18 Nov. 2025 / 受理 Accepted 30 Nov. 2025]

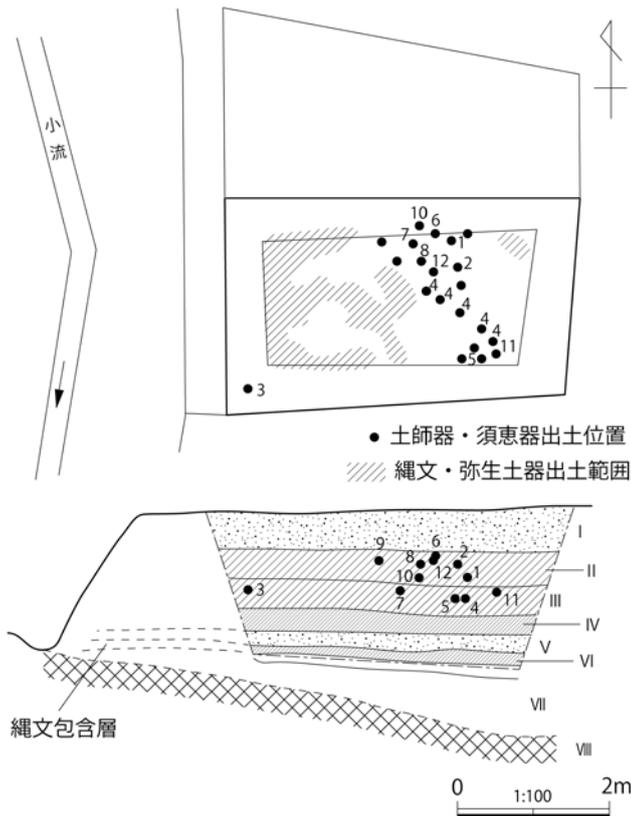


図2. 第1次調査のトレンチ.

が必要との認識を打ち出し、学校教員と鳥取県立科学博物館学芸員を中心とした調査委員による発掘調査を8月22日、23日の2日間で実施したのである。

南北3.25 m、東西5 mのトレンチが設定され(図2)、表土のI層(褐色砂層)から最下層のVIII層(黒色粘土層)まで、8層の堆積が把握された。出土遺物の様相でみると、土師器や須恵器が出土するII層(茶褐色粘土交り砂層)～III層(黄褐色粘土交り砂層)、弥生土器が出土するIV層(黒褐色粘土交り砂層)、縄文土器と弥生土器が混在するV層(茶褐色細砂層)、縄文土器が主体的に出土するVI層(黒色粘土交り砂層)～VII層(灰色細砂層)となる。VII層で湧水のために地表下2.2 m以下の掘削は困難だったが、2.8 mまでは無遺物層が続くことが確かめられ、2.9 m付近にVIII層としてクロボク層が存在すると想定された¹⁾(図3)。

この第1次調査が重要な点は様々あるが、考古学的には、①鳥取砂丘の砂層中に黒褐色ないし黒色を呈する縄文時代～古墳時代までの遺物包含層(土師層、中間層、縄文層)があること、②遺物が層序と大きく矛盾することなく年代順に出土すること、③遺物の出土量に粗密があり、無遺物層が介在することの3点の成果が見落とせない。ここで観察された黒褐色ないし黒色砂層が砂丘の停滞期に形成される腐植質土壌であるという認識と、クロスナ層という呼称が定着するのは、

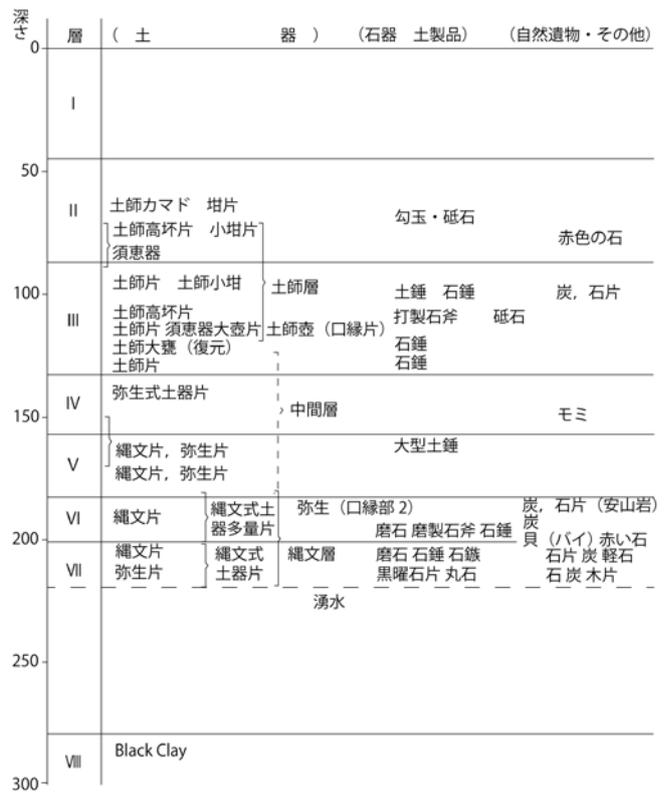


図3. 第1次調査の層序認識.

およそ10年後のこと(赤木他1965)と思われるが、その認識の基盤を用意したことは学史上も重要であろう。

しかし、『予報』には、出土遺物の全体像や総数は示されておらず、詳しい記述も、図もない遺物が多い。本文中や堆積の説明図(図3)に存在が示された遺物としては、表1に整理したのものがあるが、図示された遺物として石鏃3点、勾玉1点、石錘2点、磨製石斧1点、打製石斧1点、石皿1点、磨石1点、縄文土器片10点、土師器小埴1点、土師器大甕1点、弥生土器壺口縁部1点にすぎないので、全体像を知ることは難しい²⁾。

出土後の遺物の整理・保管がどのように行われたかという点もよくわからないが、多くの遺物が鳥取県立科学博物館に収蔵されたと考えられる。収蔵された出土資料については、目録として刊行されていないものの、館内で把握されている登録資料リスト³⁾によると、出土地が直浪遺跡とされた資料が150点弱存在する。これらの収蔵実態は多様であるが、数量が最も多いのは1955年8月23日付で受け入れられた100点余りの資料である。旧所蔵者欄に福部村教育委員会と記されたものもあることから、これらは、第1次調査出土遺物であろうとの推測が成り立つ。

ところが、リスト記載の土器のほとんどは縄文土器片で、多数出土したはずの土師器や弥生土器は登録さ

れていない。また、『予報』に図や拓本が掲載された石器、土器片がこのリストに掲載されていないなど、第1次調査出土品を網羅したものではないことがわかる。このほかに、同じ1955年でも4月20日、6月1日、8月20日、8月28日と受け入れ日が異なる資料も若干あり、資料の由来が単一ではないことを物語る⁴⁾。

一方、鳥取県立博物館所蔵品には、未登録資料もあり、遺跡名や日付と思しき数字が注記されるほかは、ほとんど未整理状態の遺物が多数存在している。それらは、元々は地下収蔵庫において木箱に入れられていたが、現在はポリ袋などに入れ替えられ、遺物収納用コンテナにまとめられているもので、直浪遺跡の出土品は、コンテナ8箱(36袋)分存在する。

この資料中には、登録リストにはない弥生土器や須恵器、石器などがあるほか、一部に登録番号が記された破片も混在している。これらの中にも第1次調査出土品が含まれている可能性が高いと考えられる。ただし、注記に「直浪 S 550330」と記された破片が多数ある。「550330」は、「1955年3月30日」の略記と考えられるから、第1次調査の5ヶ月ほど前の日付であり、遺跡に関心が寄せられる中で採集されていたものが一括して博物館に寄贈されたと考えられるものも混在している。

残念ながら、これら資料は、まとめて報告されたことがなく、第1次調査の全体像をわかりにくくしている。筆者は、自らが関わった直浪遺跡の発掘調査成果を報告する中で、鳥取県立博物館所蔵土器の一部を紹介したことがあるが(高田2018)、第1次調査出土遺物全体について詳しく追究できておらず、土器以外の遺物も検討できていなかった。そこで、小論では、研究史の起点である第1次調査出土遺物の復元を試みる。そして、それを補う1955年出土の遺物群について、追跡可能な範囲で資料化して報告する。

2 出土遺物の概要

まず、第1次調査出土品として確実なのは『予報』に掲載された資料である。ただし、註2に記したように、図や拓本が掲載されたものの中には調査で出土したものだけではなく、それ以前の採集品も含まれているようだ。それらを除いて第1次調査出土品が抽出できれば望ましいが、確実には難しい。したがって、『予報』掲載資料を第1次調査出土品に最も近い資料群としよう。これを資料Aと呼ぶ。

なお、鳥取県立博物館の登録遺物の注記方法は、「○
○○-○○○」という2種類の3桁の数字をハイフンで結んでおり、前半は材質などによる区分、後半が資

表1. 報告書で言及された第1次調査出土遺物。

遺物名	数量	出土層位	備考
土師小埴	2?	II, II~III	1点図あり
土師かまど片	1?	II	
土師器(埴, 高坏片)	多数	II~III, III	
土師器(口縁部片)		III	
土師器(大甕)	5,60片	III	1個体に復元, 図あり
須恵器(坏片)	2, 3	II~III	
須恵器(大壺片)		III	
弥生土器片	少量	IV, V, VI	壺口縁部片図あり
縄文土器片	多量	V, VI	10点図あり
土錘		II~III, V	
勾玉	1	II	
砥石		II, III	
石錘	多数	II~III, IV, VI	2点図あり
石片	多量	II~III, V, VII	
打製石斧	1?	III	1点図あり
磨製石斧	1?	VI	1点図あり
磨石	1?	VI	1点図あり
石鏃	3?	VIまたはVII	3点図あり
黒曜石片		VIまたはVII	
モミ	3	V	
貝(バイ)	1	VII	

料番号と考えられる⁵⁾。番号が書かれたシールが資料本体に貼られているものもあるが、ポスターカラーなどで番号を書いたのちにニス塗りしているものも多い。シールは経年劣化で剥離しているものがあり、シール痕跡から登録資料であったことは判明するものの、番号が特定できないものもある。

次に、第1次調査出土品の可能性が高いものとしては、登録リストに記載されたもののうち、1955年8月23日(一部に8月28日)受け入れとされた資料がある。主として縄文土器と石器であるが、一部に弥生土器、古代から中世のものと考えられる土錘がある。これら103点を資料Bとする。ただし、この資料の中には「昭和23年6月24日」等の墨書注記が残るものが含まれていたり、『予報』掲載の土器が含まれていないなど、第1次調査出土品だけで構成されていない点に問題がある。

また、登録リストに記載されながら、日付や資料解説などが付されていない土器と石器が21点ある。登録番号は資料Bと連続する番号が付されており、一体と考えうることから、やはり第1次調査出土品の可能性が高い。これらを資料Cとする。ただし、これも第1次調査出土品とみなすには難点がある。土器本体には「直浪S」と注記され、直浪遺跡出土と見て問題ないような縄文土器片ではあるが、注記された登録番号がリスト上は他遺跡のもの、あるいはリストにない番号であるものを含んでいるからである。

これらとは別に、上述したように未登録資料が多数あり、この中に第1次調査出土品が含まれている可能

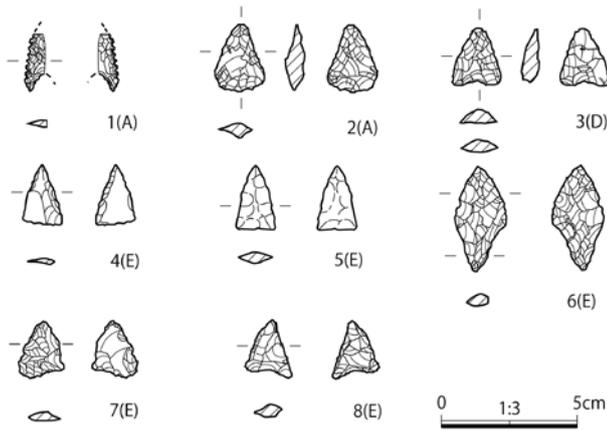


図4. 石鏃実測図.

性がある。とくに土師器は「多数」出土しているが、登録されていないので、その可能性が高い。これらから「直浪 S 550330」の注記があるものを除いた一群を資料 D としよう。

資料 A ～ D までが第 1 次調査出土遺物の可能性があるものと考えられるが、登録リストに記載されたものでも現物が確認できないものがあつた。一方、未登録資料の中でも、時期が判明するものや口縁部が残存して実測可能な資料も多い。小論では、これらを資料 E として、第 1 次調査を補うものとして取り上げる。まとめると次のようになる。

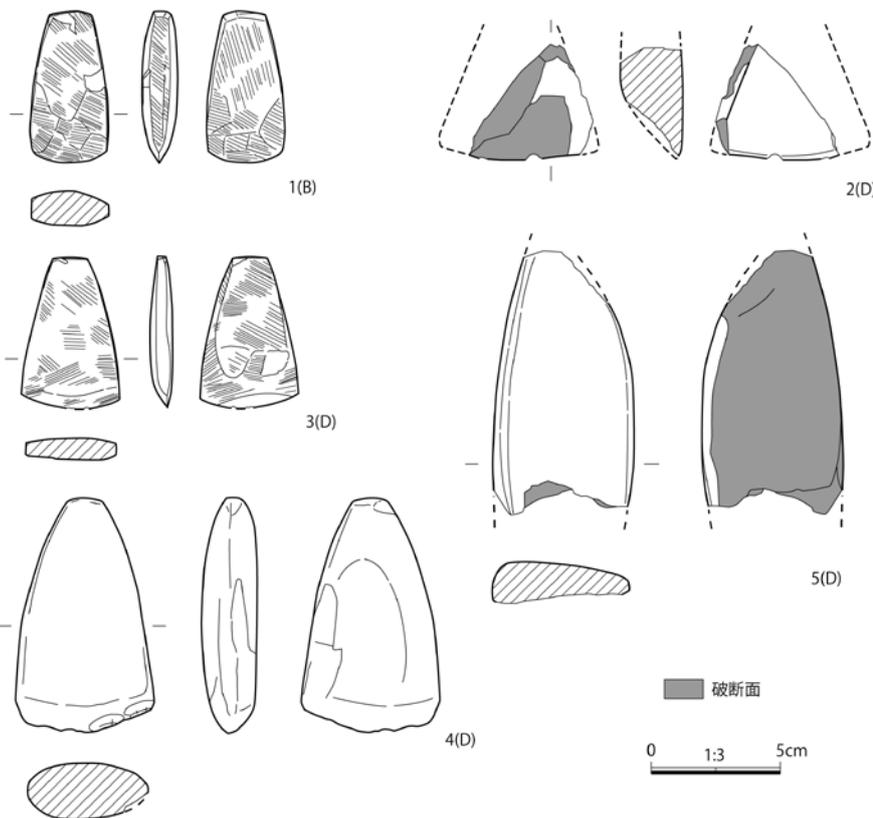


図5. 磨製石斧実測図.

資料 A：『予報』掲載資料

資料 B：登録資料（日付あり）

資料 C：登録資料（日付なし）

資料 D：未登録資料（注記 550330 以外）

資料 E：未登録資料（注記 550330）

以下に掲載する実測図は、資料の材質・性格ごとにまとめており、資料 A ～ E までの分類は、図中にキャプションを加えて記した。また、法量などについては、表 2 にまとめた。

1) 石器・石製品

石鏃 石鏃は 8 点ある（図 4、図版 1）。いずれも打製で、無茎式が 7 点、有茎式が 1 点である。『予報』に掲載された無茎式鏃 3 点のうち、2 点は現物を確認できたが（図 4-1, 2）、1 点は見当たらなかった。また、図 4-1 は「直浪 550330」と注記された小箱に図 4-4 ～ 8 と一緒に入れられており、図 4-2, 3 はそれぞれチャック式ポリ袋に入れられているが登録番号などは付されていない。法量は表 2 に示すとおりである。

図 4-1 は、黒曜石製の鋸歯鏃の破片である。図 4-2 は暗赤褐色を呈するチャート製で、平基式の三角形鏃である。石鏃としては分厚く、一面に大きな剥離面を残しているため、加工途中の未成品の可能性もある。図 4-3 は明緑灰色を呈する流紋岩製で凹基式の三角形鏃である。2 と同様に、一面に大きな剥離面を残している。図 4-4 は、石材は火山岩というところまでしか判明しない。平基式の三角形鏃である。片面に大きな剥離面を残し、その縁辺に細かく押捺剥離を施している。図 4-5 も火山岩製で平基式の三角形鏃である。飛砂の影響か、表面は磨滅している。図 4-6 は、黒曜石製で有茎式の石鏃である。図 4-7 は、黒曜石製の平基式の三角形鏃である。図 4-8 は、石英製の凹基式の三角形鏃である。

磨製石斧 磨製石斧は、第 1 次調査において少なくとも 1 点出土しているようだが、『予報』に掲載された資料は確認できなかった。しかし、1955 年 8 月 23 日受入の登録資料として両刃の定角式磨製石斧が 1 点あるほか、未登録資料中にも片刃の破片が 1 点ある（図

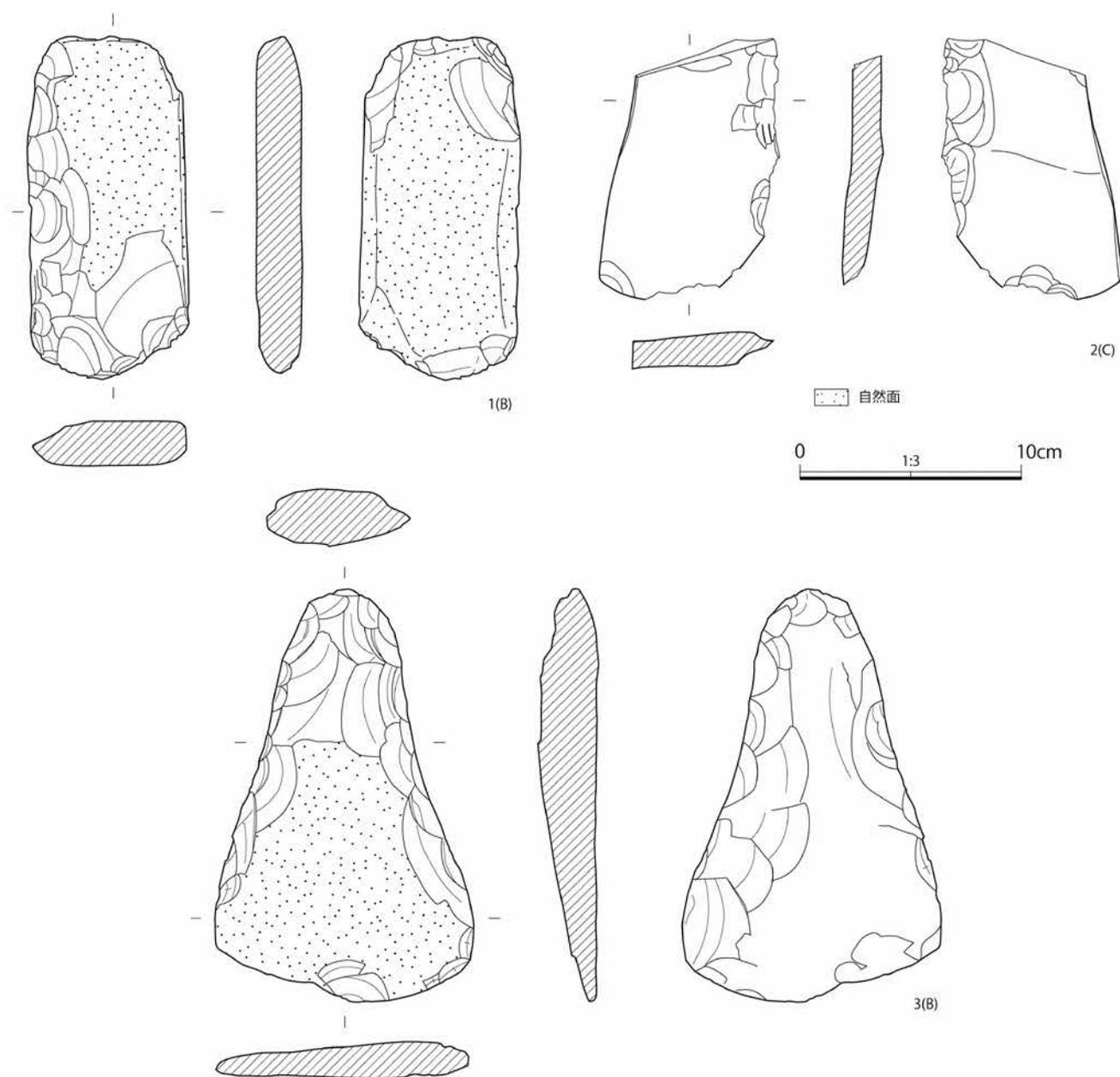


図6. 打製石斧実測図。

5, 図版1)。

図5-1(登録番号421-075)は、旧『鳥取県史』第1巻(115頁, 図41-6)にも紹介されたものである。両刃であり、刃部の側面形にも偏りはないが、身部は一面がやや膨らみをもっているのに対し、反対面は平らに仕上げられている。前者を前主面(実測図平面図の左側), 反対面を柄に固定される後主面側(平面図右側)と考えた。図5-2(未登録)は、大きく破損しており、全形はよくわからないものの、刃部と側辺の一部が残存しており、定角式石斧に復元しうるものである。片刃と考えられる。

第1次調査出土品ではないが、直浪遺跡出土として鳥取県立博物館に収蔵されている磨製石斧が他に3点

あり、この際報告しておきたい。

図5-3は、一般市民から1998年に寄贈された片刃の定角式磨製石斧(登録番号421-126)である。ただし、遺物には「S48.3.40」の注記がある。身部の膨らみに差があり、一面は平らに磨き込まれている。平らな面が後主面と考えられる。図5-4は、1974年に収集されたものである(登録番号421-124)。

図5-5は、1955年8月1日受入の資料である(登録番号443-007)。両端が破損しているほか、片面も大きく剥離している。登録リスト上では「石包丁」とされており、確かに外湾刃半月形を呈するようであるが、穿孔はなく、石包丁の未成品としても分厚すぎる。弥生時代の石器がほとんどない中において、これを石

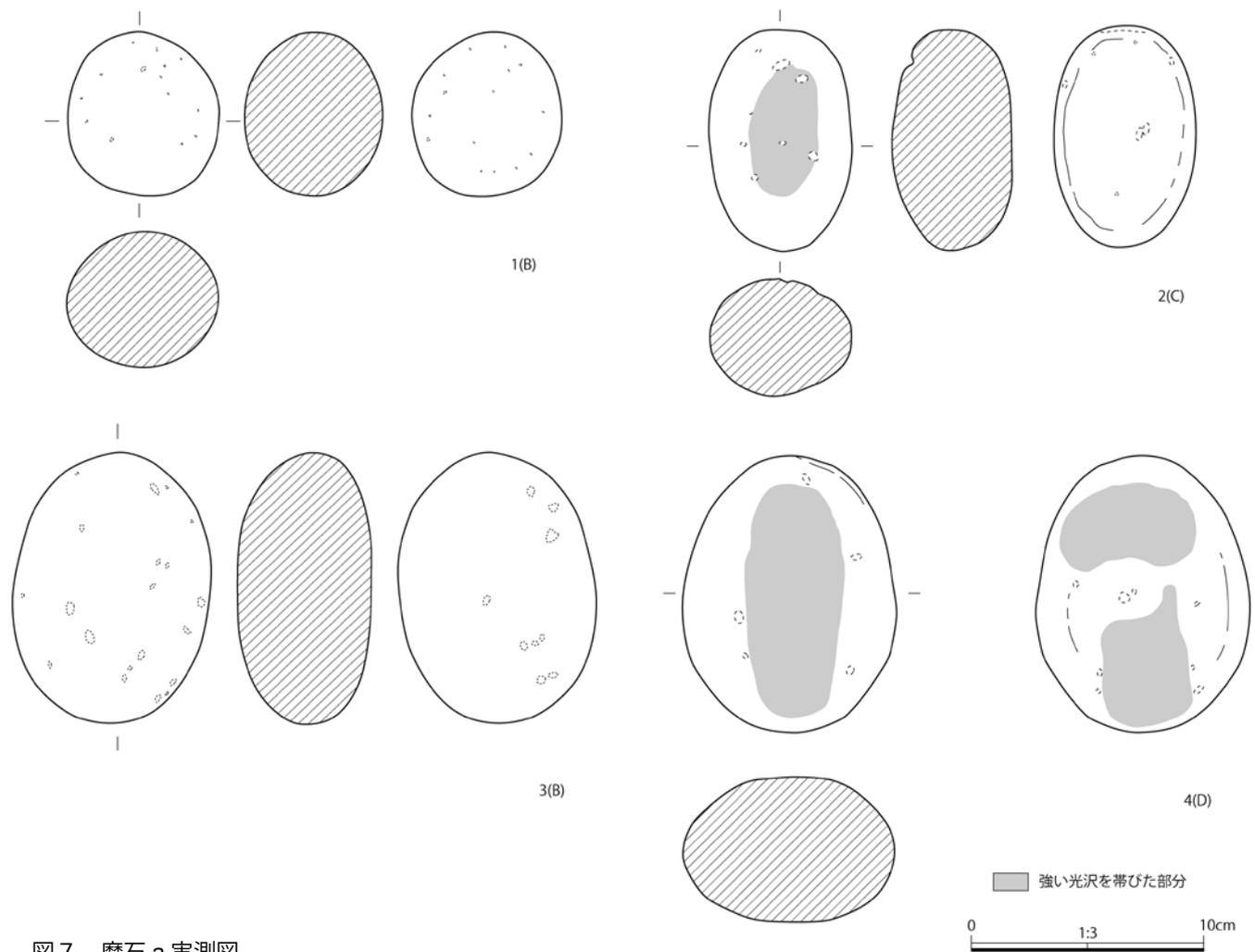


図7. 磨石 a 実測図.

包丁と考えるのは難しい。磨製石斧の未成品と考えるおきたい。

近年の縄文磨製石斧に関する研究を参照すると、山陰地方では定角式石斧が存在しないとされているが(水ノ江 2024)、直浪遺跡では明確な面取りをもつ定角式石斧が存在する。隣接する但馬地域の状況や、鳥取市高住遺跡群の調査成果も考慮すると、少なくとも山陰東部では一定量の定角式石斧が存在するとみなすべきであろう(大本 2025, 中尾 2013, 北 2015)。面取りが明確な図 5-1, 3 は中期段階に、面取りが不明確になった図 5-4 は後期中葉以降の所産と考えられる。

打製石斧 打製石斧もまた、第 1 次調査において少なくとも 1 点出土したが、『予報』に掲載された資料は確認できなかった。しかし、1955 年 8 月 23 日受入の登録資料が 3 点ある(図 6, 図版 2)。資料 B としたが、図 6-1 には「鳥取県岩美郡福部村大字湯山字スクナミ

打製石斧」の墨書があり、注記の様式が他と異なるため、第 1 次調査の出土品ではない可能性がある(登

録番号 416-026)。長方形の板状石材を利用した、短冊形もしくは撥形打製石斧の加工途中品と考えられる。

図 6-2 (登録番号 416-027) は、1 と同様に、長方形の板状石材を利用したもので、短冊形もしくは撥形打製石斧の未成品と考えられる。「昭和二十三年六月廿四日福部村大字湯山スクナミ」と読める墨書による注記があるため、これも第 1 次調査出土品ではない可能性がある。

図 6-3 (登録番号 416-008) は、完形品である。柄に装着されると考えられる面は大きな剥離面によって平坦面を作り出し、その反対面は大きく自然面を残している。「3」という注記があり、「Ⅲ」層出土と考える余地もあるが、出土層位が注記された遺物が他にないため、確証はない。

磨石 円礫ないしは楕円礫で、ほぼ全面的に平滑な表面を呈するものを磨石 a 類(図 7, 図版 3)、平面形が石鱗形を呈する楕円礫の表裏に摩耗面、側面に敲打痕が認められるものを磨石 b 類(図 8, 図版 3)とする。

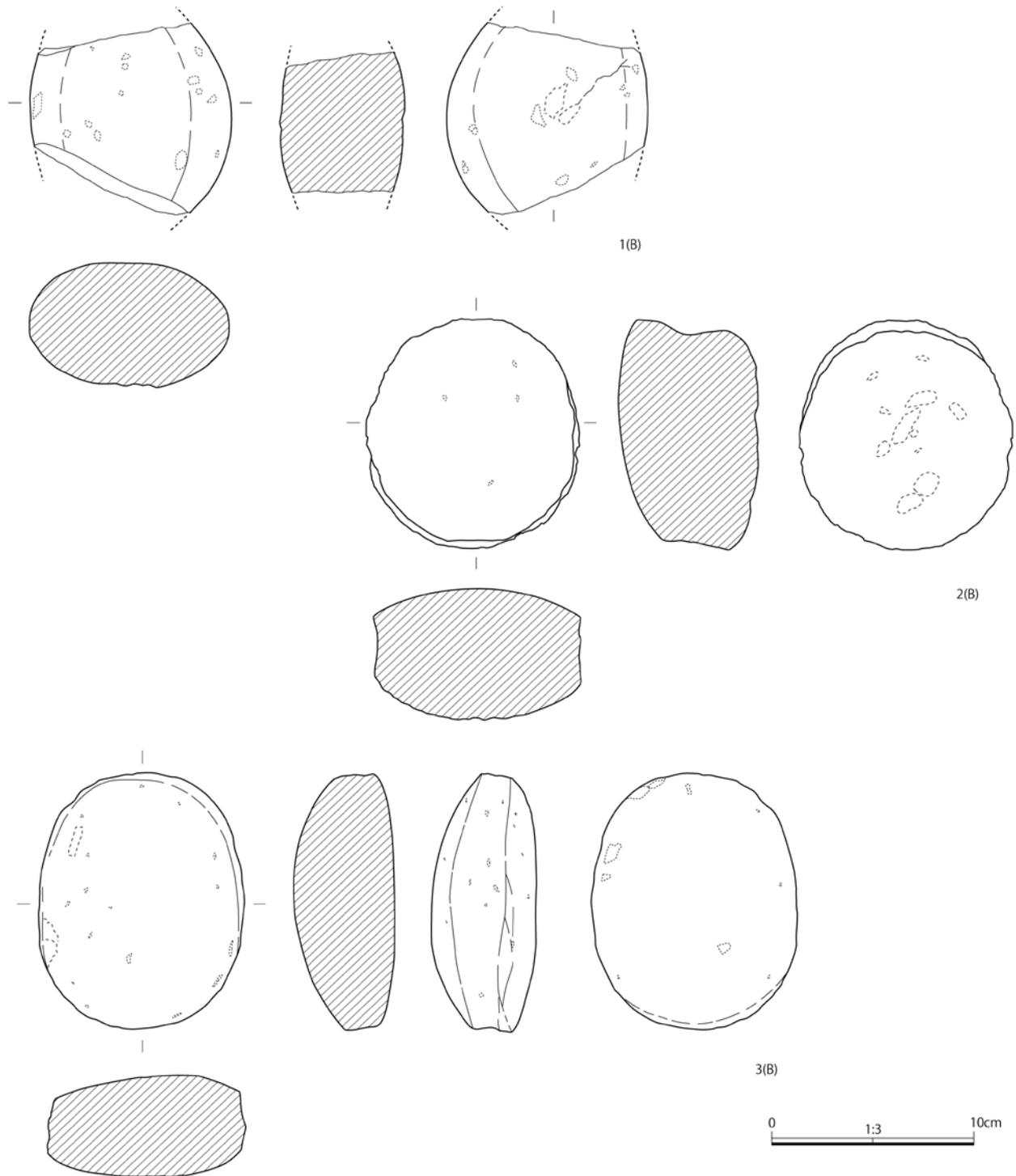


図8. 磨石 b 実測図.

磨石 a 類の図 7-1 (登録番号 435-011) はほぼ球形に近い形状をなす。表面はまんべんなく平滑な面を呈する。「スクナミ」という注記がある。図 7-2 (登録番号 418-016) は、リスト上は「敲石」に分類されているが、一方の面に強く光沢を帯びた磨り面があり、磨石であろう。図 7-3 (登録番号 435-013) は、表面はまんべんなく平滑な面を呈して、特定の位置に偏らない。図 7-4 (未登録) は、表裏面ともに強く光沢を

帯びた磨り面が認められる。

磨石 b 類の図 8-1 (登録番号 435-012) は、全体的に平滑であるが、磨り面が特定の場所に集中することはない。側面もまた、平滑で 2, 3 のような敲打痕はない。長軸方向の 2 方向を欠損している。

図 8-2 (登録番号 435-014) は、凸面となる方は非常に平滑で、光沢を帯びるため、ここが磨石としての作業部位と考えられる。これに対して平らな面や側面

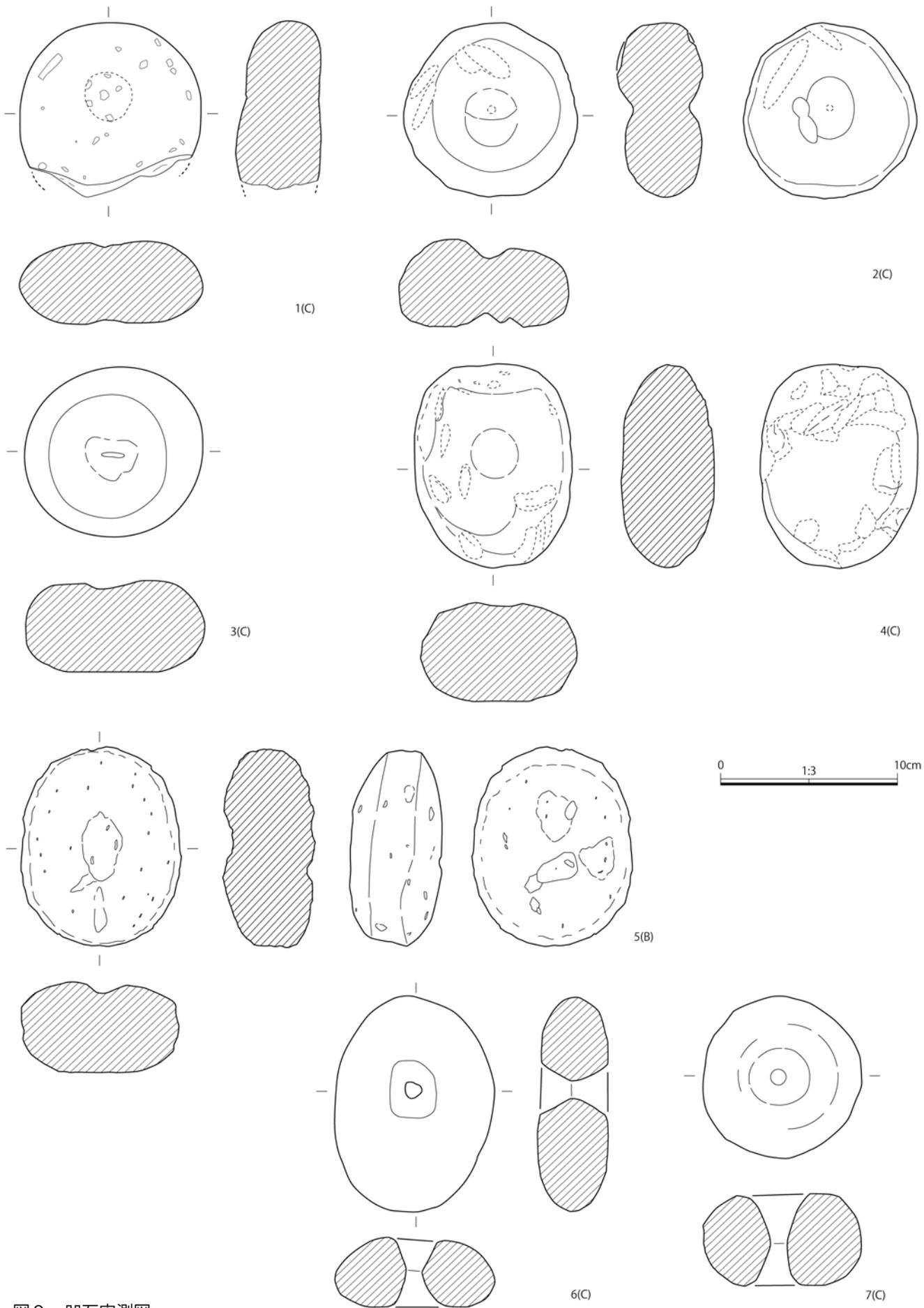


図9. 凹石実測図.

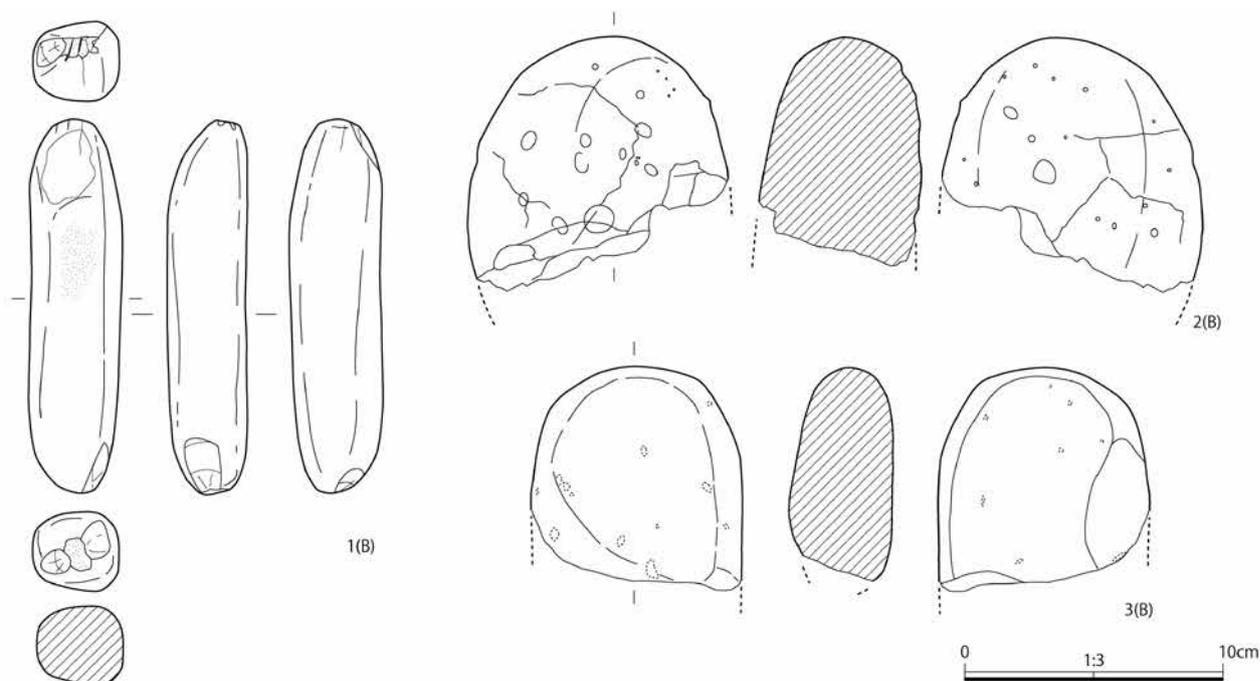


図 10. その他の礫石器実測図.

外周には敲打痕が認められ、側面は全体的に内湾する。この部分は敲石のような使用形態と考えられる。図 8-3 (登録番号 435-015) は、2 と同様に、凸面となる方は平滑で、光沢を帯びる一方、反対の平らな面は平滑でない。また、側面外周にはやはり敲打痕が認められ、内湾する部分が認められる。

凹石『予報』では「坂口氏蔵」とされた石皿が図示されているが、現物は所在不明である。おそらく、第 1 次調査以前に出土したものであろう。平面形は長径約 36cm、短径約 29 cm の楕円形を呈し、中央が窪む。底面から最も高い縁部までの高さは 9.4 cm、厚さは 4.2 cm あるようだ。上條信彦の分類に照らすと、1 凹類となるものである (上條 2007)。

石皿以外に、台石となるべき石器が存在し、平面の中央に凹みがあるものを凹石とする (図 9, 図版 4)。平面形がほぼ円形を呈する a 類 (図 9-1 ~ 3)、楕円形を呈する b 類 (図 9-4, 5)、中央の凹みが貫通して穿孔された c 類に分けうる (図 9-6, 7)。c 類は、さらに平面が円形のもの、楕円形のものがあるようだ。

図 9-1 (登録番号 418-015) は、一面のほぼ中央に径 2.5 cm ほどの範囲で凹んだ部分があり、その部分に敲打痕が集中する。図 9-2 (登録番号 436-003) は、表裏面の中央に凹みがあり、両面使用されたようである。一部に鋭い工具のようなものでつけられた複数の傷があるが、あるいは発掘調査時のものかもしれない。図 9-3 (登録番号 418-011) は、1 と同様に中央に径 3 cm ほどの凹みがあり、その内部は敲打痕のようなざ

らついた面となる。一方、その周辺から裏面にかけては平滑な面が広がっている。

図 9-4 (登録番号 435-002) は、凹石 b 類とするもので、片面の中央がやや窪んでいる。表裏面には、2 と同様に後世のものと考えられる傷がつく。図 9-5 (登録番号 435-006) も凹石 b 類とするものであるが、4 と異なって側縁に幅 2 cm 程度の面がある。

図 9-6 (登録番号 418-012) は、中央に穿孔がある凹石 c 類とするものである。平面形が楕円形を呈する。穿孔は両面から施されている。孔の貫通部分では平面形は円形であるが、6 では孔の開け始めの部分は平面形が楕円形ないし長方形を呈している。図 9-7 (登録番号 418-014) は、6 と異なって平面形が円形を呈する。凹石 c 類の器表面は平滑な磨り面も、敲打面もなく、機能や用途はよくわからない。

その他の礫石器 礫石器で上記の分類に収まらないものや器種不明なものが 3 点ある (図 10, 図版 4)。

図 10-1 (登録番号 411-045) は、登録リスト上は石錘に分類されているが、端部に敲打痕があるため、敲き石となる可能性がある。

図 10-2 (登録番号 418-013) は、軽石のように発泡による空隙が多く観察できるが、軽石ではない。材質は不明であり、使用痕も観察できないため、器種、用途もよくわからない。

図 10-3 (登録番号 435-016) は、軽石である。一部欠損していると考えられる。加工痕は観察できないが、浮子として利用された可能性がある。

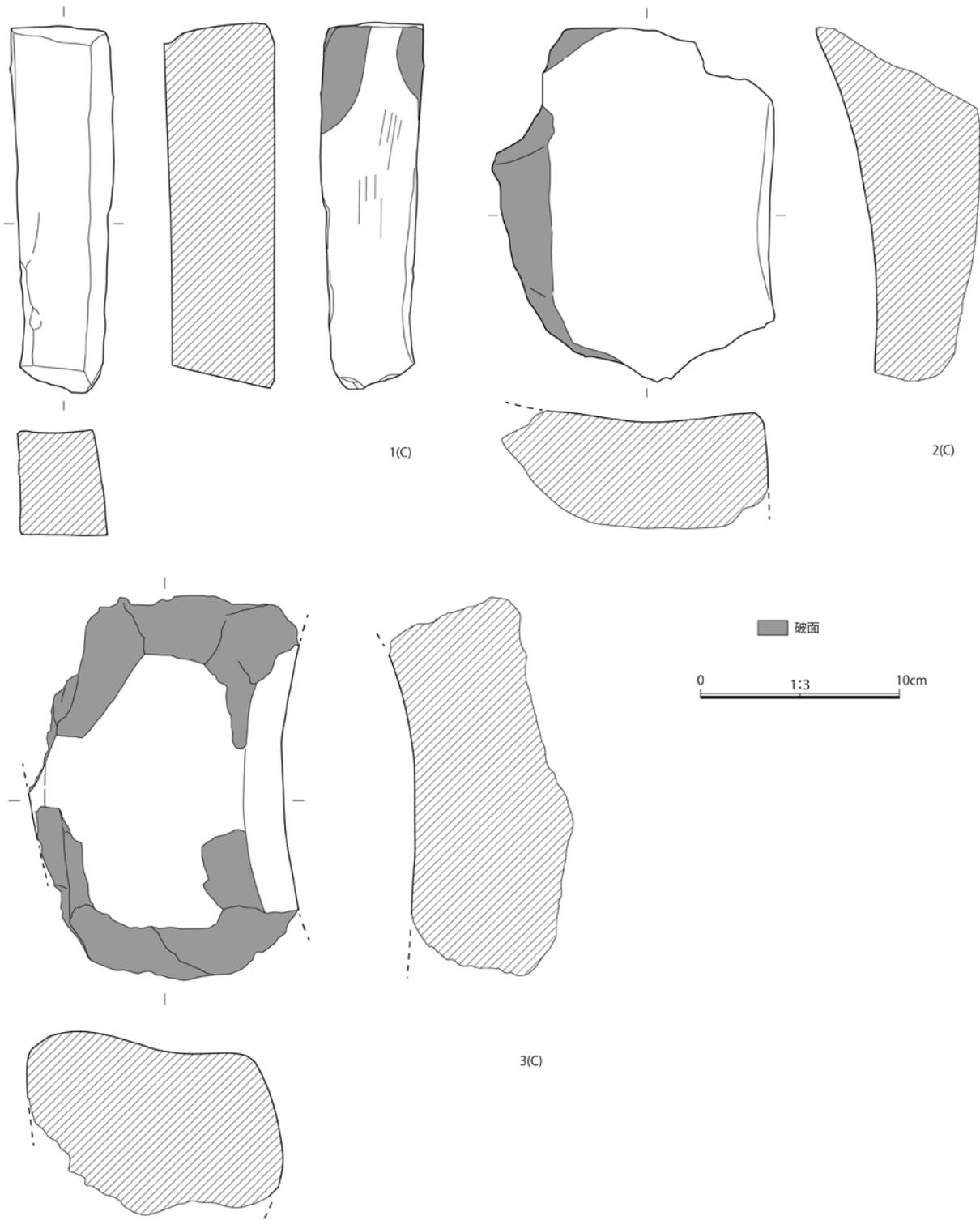


図 11. 砥石器実測図.

砥石 大型の砥石が3点ある(図11, 図版5)。登録リスト上は受け入れ年月日が記されていないが, 1955年8月23日受け入れの磨石類につぐ番号がついているため, やはり第1次調査出土品の可能性がある。出土層位はⅡ層ないしⅢ層と観察されており, 古墳時代のものである可能性も考えられる。同様な砥石は, 筆者が行った2014年度, 2015年度の調査でも出土して

いるが(高田2018), 弥生時代後期後葉~終末期に位置づけられる第2クロスナ層から出土している。

図11-1(登録番号438-009)は, 砥面が表裏両面にあり, いずれの面にも長軸方向の細かい擦痕が認められる。長側辺の面は破断面であり, 本来はもっと大きかった可能性がある。図11-2は, 登録番号は「483-008」であるが, 「438-008」の誤記の可能性がある。砥面は

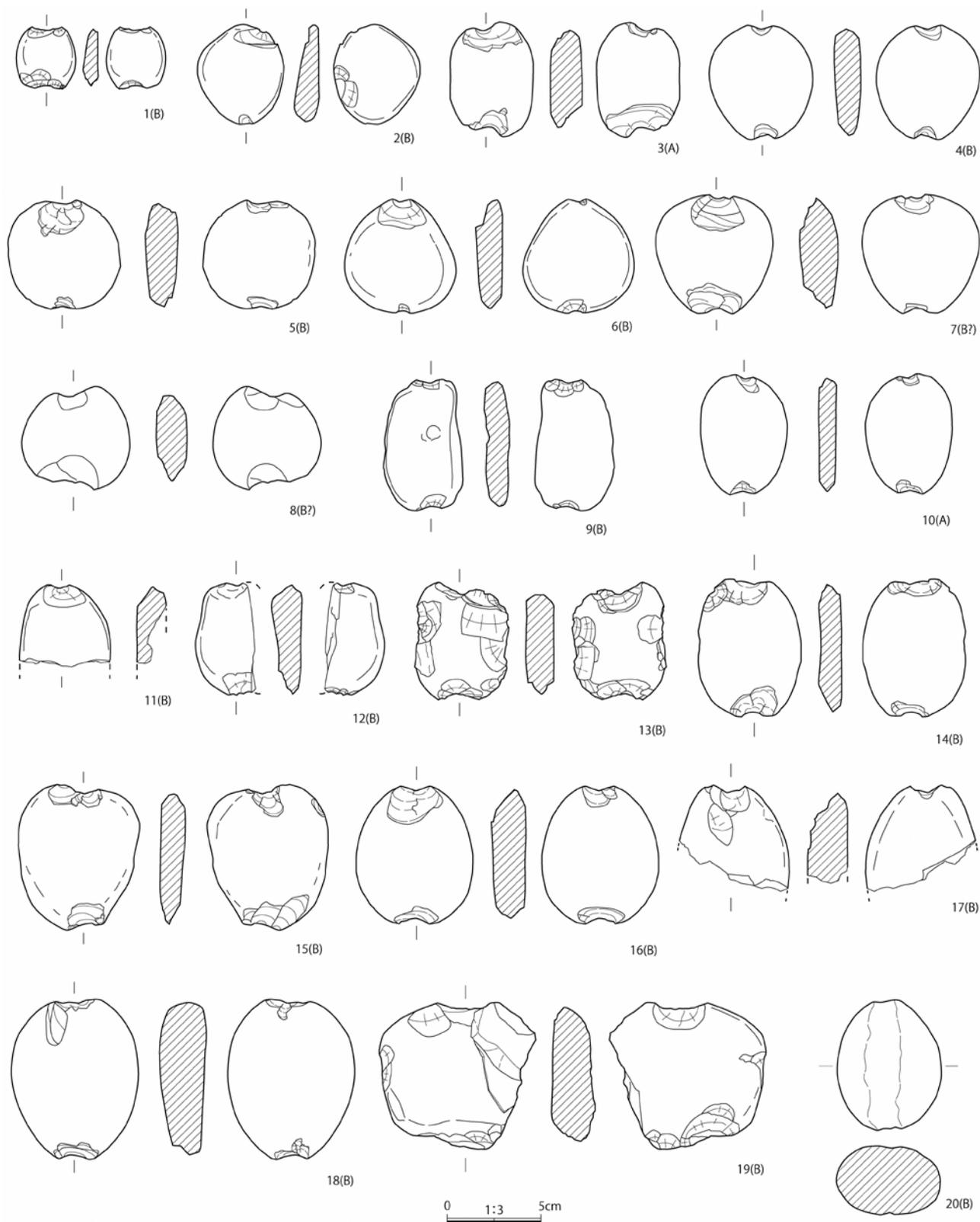


図 12. 石錘実測図。(登録資料)

図示した面と右側面が残存するが、裏面、左側面は破損しており、短辺側も欠損している。また、「鳥取県岩美郡福部村大字湯山字スクナミ 石斧砥石」という墨書の注記があるため、第1次調査以前に出土していた可能性がある。図 11-3 (登録番号 438-002) は、2

と同様に、図示した面と右側面のみ残存するが、そのほかは欠損している。

石錘 『予報』によると、石錘が多数出土したと書かれているが、数は示されていない。鳥取県立博物館所蔵品は、扁平な石材の両端を打ち欠いた打欠石錘が

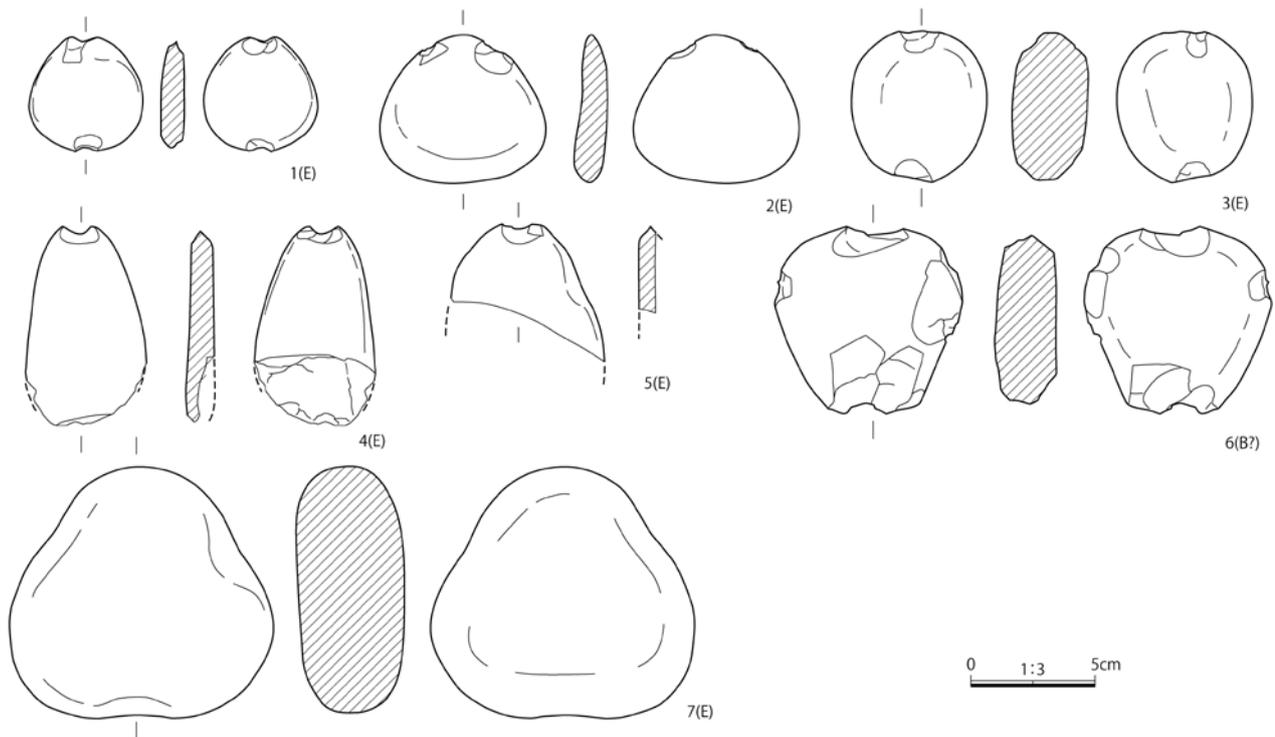


図 13. 石錘実測図 (未登録資料)

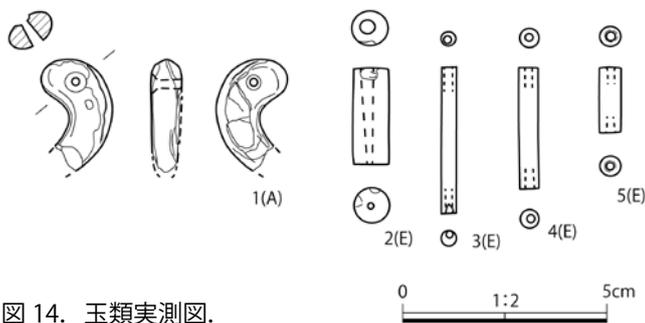


図 14. 玉類実測図.

25点、有溝石錘が1点、打欠や溝はないものの、形状や紐かけ痕などから石錘と考えられるもの1点の27点が確認できる。(図12, 13, 図版6, 7)。

大きさや打欠部の形状からすると、『予報』に掲載されたものは、図12-10(登録番号411-028)、図12-3(登録番号411-030)の2点と考えられる。これに連続する番号の打欠石錘は他に19点あり、いずれも受け入れ年月日が8月23日または28日となっており、第1次調査出土品の可能性が高いと考えられる。また、未登録資料中にも同様な打欠石錘が7点あり、シールが剥がれた痕跡があるものを含んでいることから、1次調査出土品が含まれている可能性がある。とくに、図13-6は、剥離したシール痕跡の下に「411-41」と読める注記があり、本来は登録資料であった可能性が高い。

打欠石錘は、重量と厚さに相関があり、打欠の方法によってもいくつかのバリエーションがある。ここでは、重量分布を元に、50g以下を打欠I式、100g以

下を打欠II式、100gを超えるものを打欠III式と分類する。この分類は、打欠石錘の用途を検討した山本直人によって、80～110gのものは漁労用である可能性が高いとされていること(山本2011)、鳥取市高住遺跡群における石錘の検討によって、中期の石錘は50～100gのものが多いという地域的な状況が明らかにされていることを踏まえたものである(中尾2013)。

打欠I式のうち、図12-1(登録番号411-031)のように一段と小型軽量のものは、さらに分類可能と思われる。また、打欠II式、III式の中には、図12-19(登録番号411-022)、13(登録番号411-052)、図13-6のように、4方向に打ち欠きされたものがあり、2方向のものとは紐のかけ方が異なっていると考えられる。

切目石錘はみあたらず、有溝石錘は1点のみである。また、石錘とは断定できないものの、3カ所に紐ずれ痕がある図13-7(未登録)は、大型石錘の可能性はある。

玉類 玉類は勾玉1点、管玉4点がある(図14, 図版7)。図14-1(登録番号462-013)は、II層、すなわち古墳時代に相当する層から出土した流紋岩製の勾玉である。尾部など一部を欠損する。黒色を呈する部分と白色を呈する部分が互層になった部分を素材に用いており、表裏面には白色部が見えるが、中央には黒色部を挟む。白色部は一部剥離している。一見、両面穿孔のように見えるが、片面穿孔の結果、反対面の白色部が大きく剥離した結果と考えられる。

この他に、管玉が4点ある。登録リストには、上述

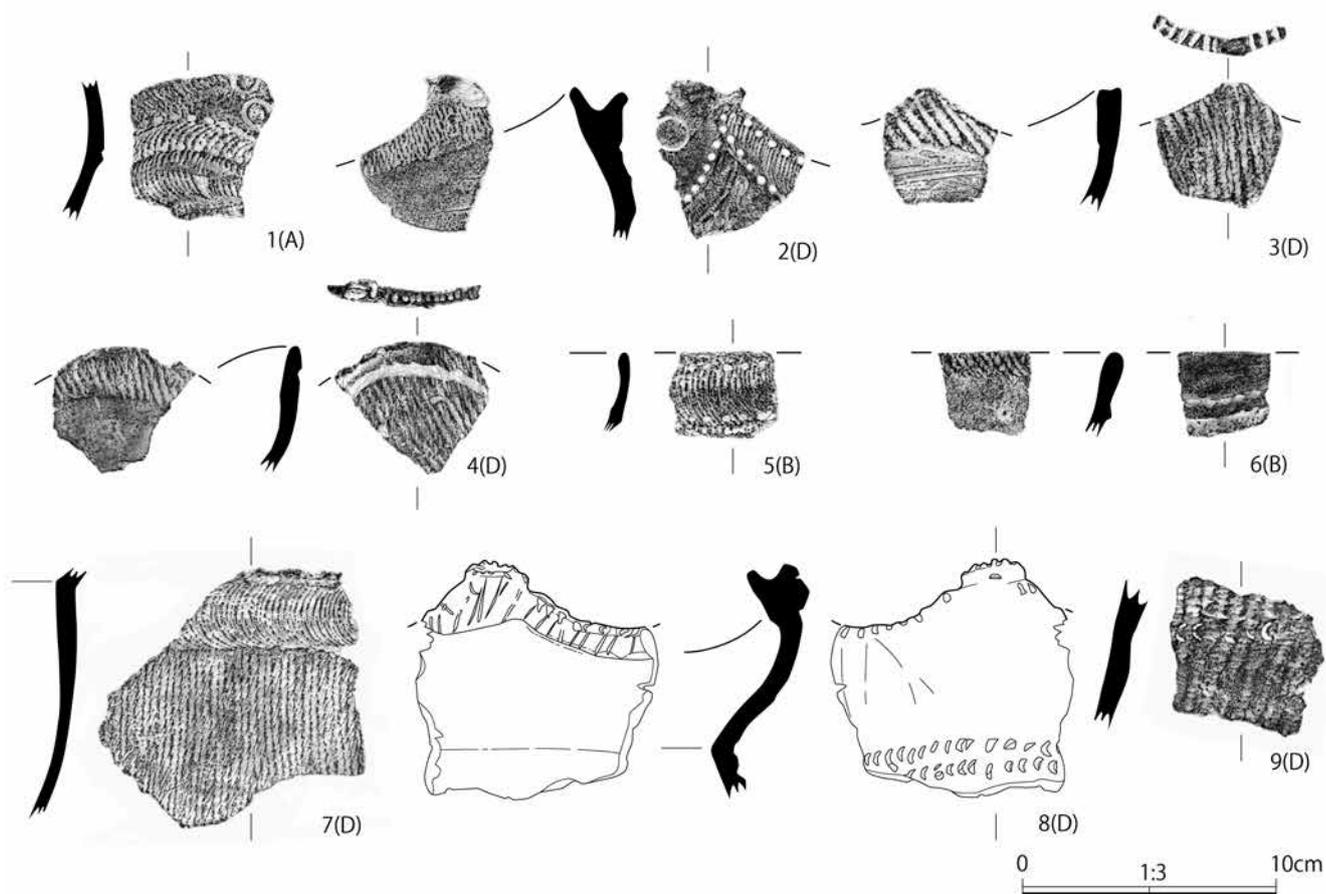


図 15. 縄文土器実測図 (その1)

した勾玉と同時に1972年に福部村から移管したとある。『予報』に記述はないが、これまでに管玉未成品が報告されたことはある(亀井・清水1982)。

図18-2(登録番号463-005)は、濃緑色の花仙山産と考えられる凝灰岩製の管玉である。片面穿孔である。また、図18-3～5は、一括して同じ登録番号が付されたものである(登録番号463-006)。3は、灰オリーブ色の凝灰岩製である。径は0.4cmと細いが、長さ3.6cmと長大で両面穿孔と考えられる。4は、緑灰色の流紋岩製で、やはり両面穿孔と考えられる。5は、灰オリーブ色の流紋岩製で、同様に両面穿孔である。

2) 土器・土製品

縄文土器 『予報』掲載の10点中6点の現物を確認するとともに、その他の有文精製土器、無文粗製土器113点を図化した(図15～20, 図版8～13)。

硬い繊維を用いて、節がやや長い縄文を施すもの、あるいはそれに加えてC字状の爪形文や半裁竹管による刺突文を施す図15-1～7は、船元I式に相当すると考える。これらは、これまでに直浪遺跡で出土した縄文土器の中でも最も古い段階に位置づけられるものである。図15-1は、『予報』に掲載されたものである

が、未登録資料である。しかし、この土器片は、図15-2, 4, 7などとともに後の第4次調査⁶⁾に伴う報告などでも紹介されている(亀井・清水1982, 文化庁1983)。これらは、第1次調査で出土した可能性が高い。

図15-8(登録番号113-002)は内湾する口縁部と胴部の境界付近にC字状の半裁竹管文が連続して施される。波状口縁の頂部に坏状の突起を付す。これも船元I式段階に位置づけられよう。同様な刺突文をもつ図15-9も、同じ段階に位置づけようとする。

次に、図16には、中期中葉～末と考える土器を掲載した。図16-1, 2は口縁部近くの外面に沈線文を施すものである。また、図16-3は、船元Ⅲ式A類の凸帯文と竹管状工具による平行線文の一部である。

図16-4(登録番号118-003)は、里木Ⅱ・Ⅲ式古段階(矢野1993)と考えられる口縁部片である。同じ段階の土器として、キャリパー形口縁で全体に撚糸文が施された図16-5(登録番号110-015)の深鉢口縁部片があり、口径33.9cm, 残存高8.4cmを測る。図16-6(登録番号118-001)は、小片ながら沈線文と撚糸文が組合せになること、また、図16-7(登録番号110-002)は、撚糸文地に波状の沈線文を施すことから、

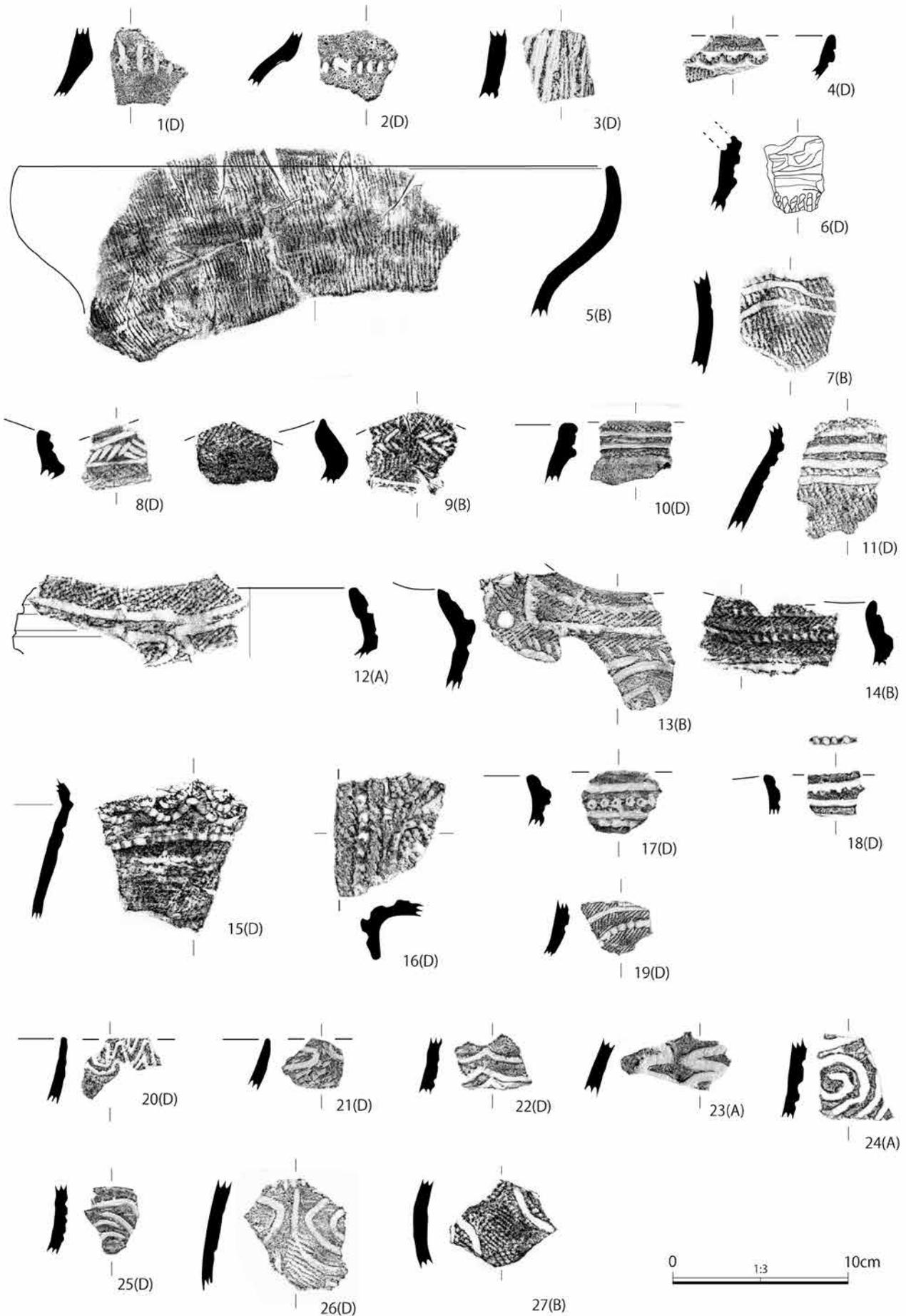


図 16. 縄文土器実測図 (その 2)

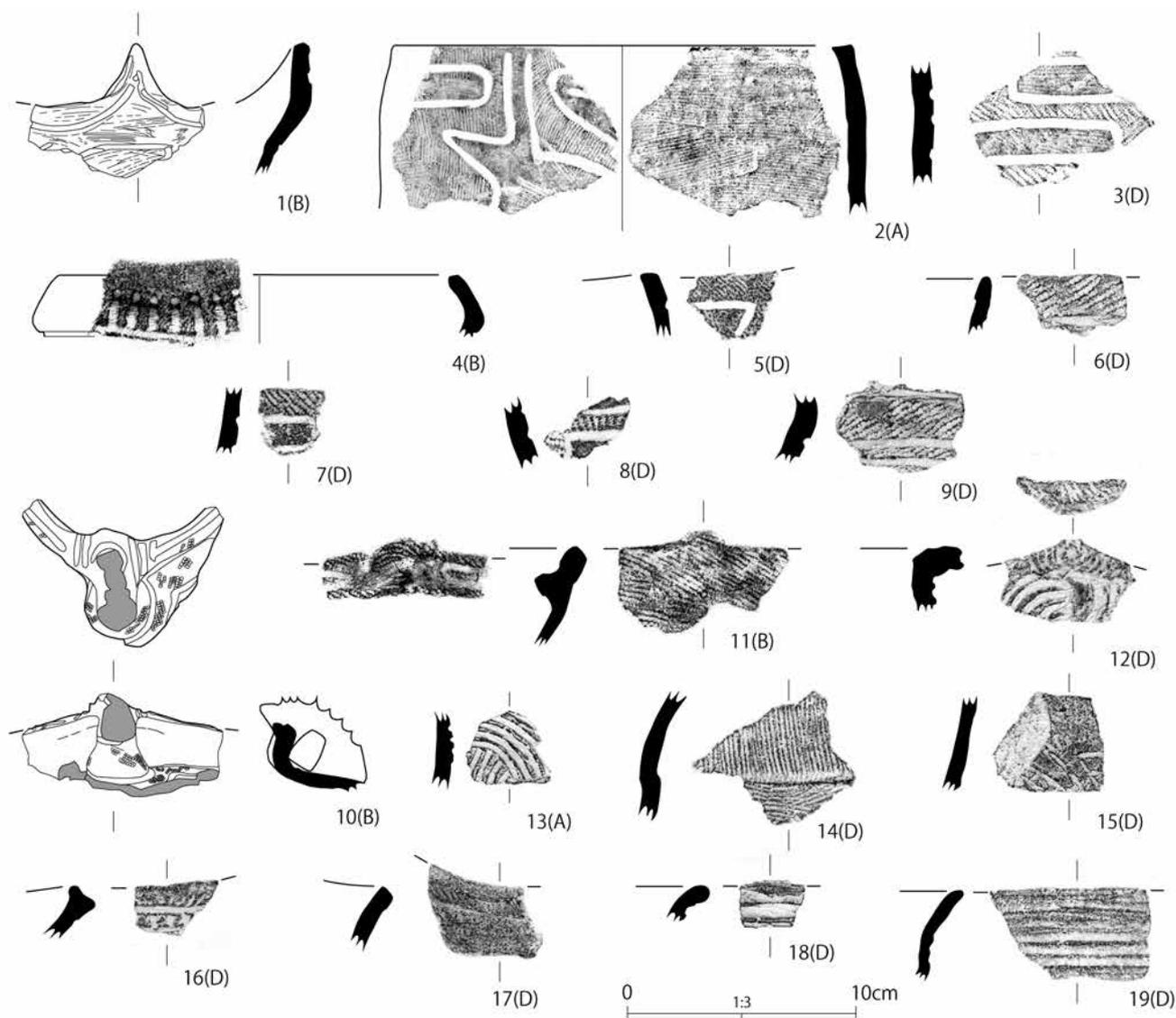


図 17. 縄文土器実測図（その 3）

やはり里木Ⅱ・Ⅲ式古段階の土器と考えられる。

図 16-8～19 は、口縁部が直立ないし内側に屈曲する器形で、口縁に沿って太い沈線文が施されるものが多い。中期末段階に降るものとする。図 16-8, 9（登録番号 110-001）は、波状口縁となるもので、口縁部外面に矢羽根状の刺突文を施す。また、図 16-10, 11 は、縄文地に平行沈線を施すものであるが、一部の沈線間は縄文を消しており、未完磨消縄文系土器と考えられる（幡中 2012）。

図 16-12 は、『予報』時には半分（登録番号 110-007）だけ報告されたが、現状は他の破片（登録番号 110-008）と接合しており、調査後に一定の遺物整理が進められていたことを示す。口径 18.0 cm を測る深鉢の口縁部片である。外面に太さ 6 mm の沈線を施し、方形や楕円形の区画文を描く。その内部は LR 縄文を充填する。内面は粘土継ぎ目と指頭圧痕をよく残す。『予報』には「6 尺」と記されており、縄文土器が多

数出土したⅥ層出土と考えられる。

また、図 16-13, 14 は、別個体として報告されたこともあったが、同一個体の波状口縁部片である。これ以外にも同一個体と考える破片があるが、図 16-14 にのみ登録番号 110-005 が付されている。外面に太さ 5 mm の沈線を施し、方形の区画文を描くほか、円形の刺突文を縦位に連続させたり、右下がりの斜線刺突文を沈線内に連続させたりする。なお、口縁部内面に厚く炭化物が付着しており、放射性炭素年代測定を行ったところ、 $4300 \pm 20 \text{ cal.BP}$ という値を得ている（高田 2018）。

図 16-15（登録番号 110-003）は、縄文地にやや太い沈線による連弧文や押し引き文が施される。図 16-16 は、大波状口縁の一部と考えられる破片で、半裁竹管状工具を用いた押し引き文によって楕円形文ないし渦巻文を施すものである。図 16-17～19 も、押し引き文や沈線内刺突文などが共通する土器片で、同様な段階のもの

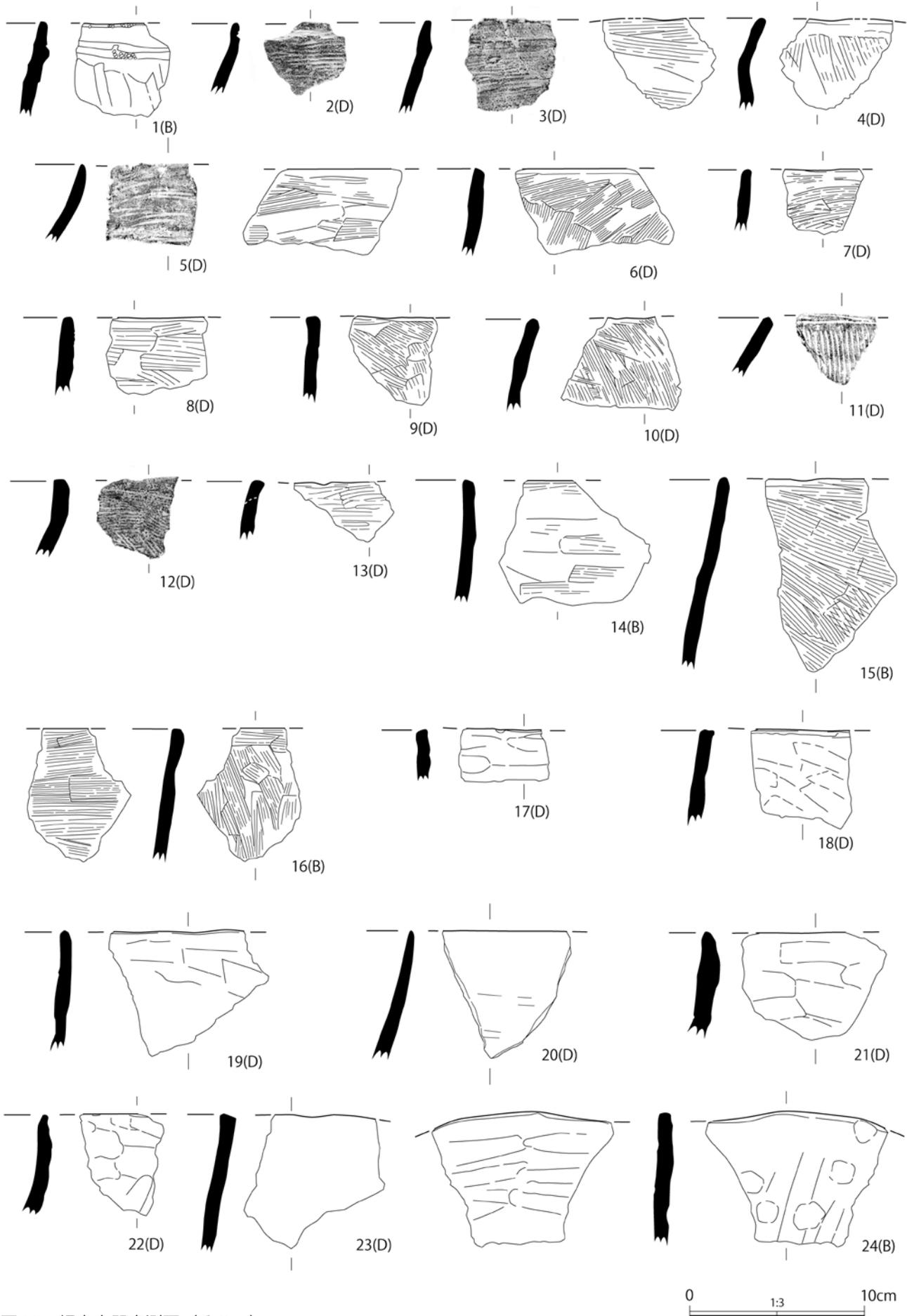


図 18. 縄文土器実測図 (その 4)

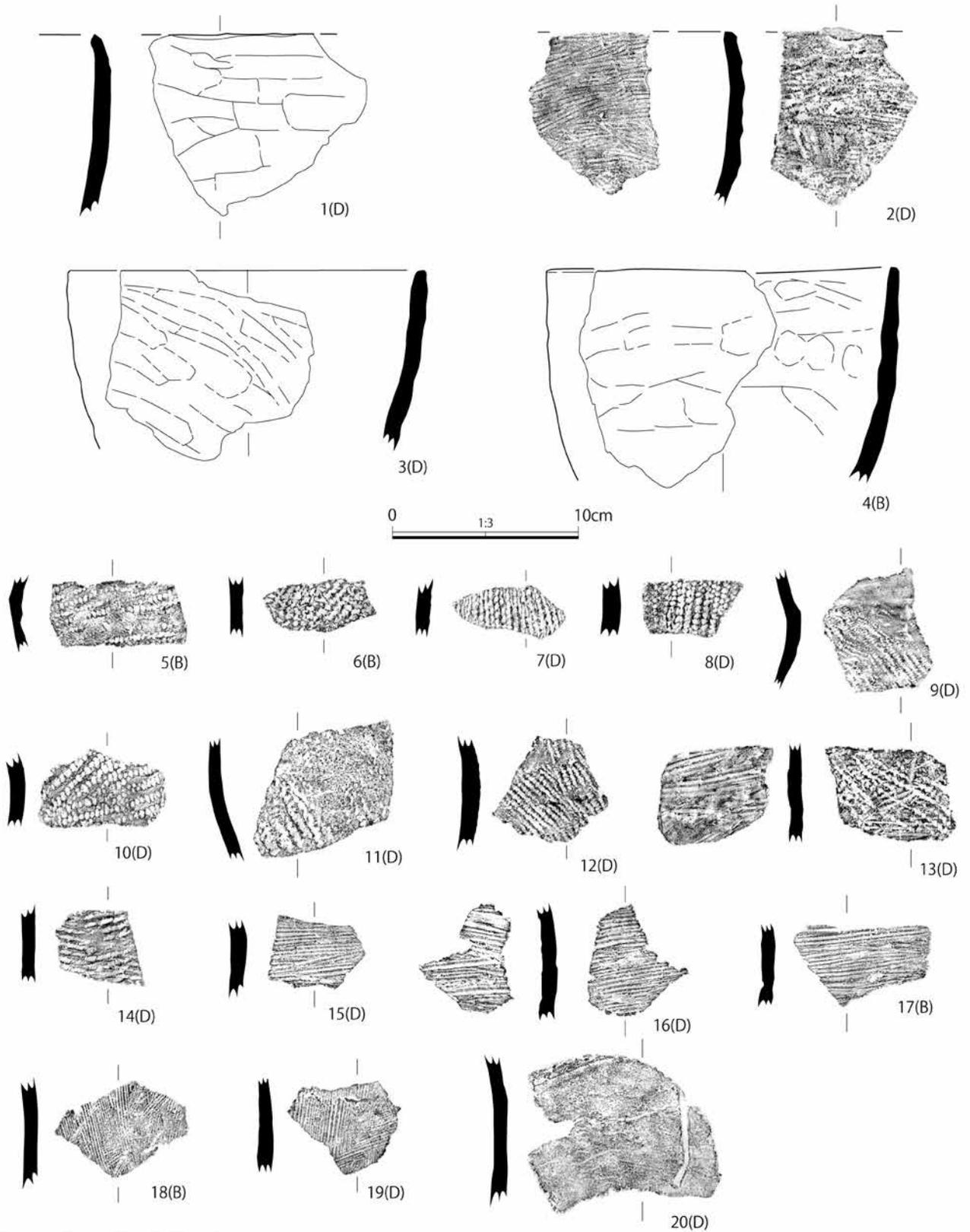


図 19. 縄文土器実測図 (その 5)

考えられる。

一方、図16-20～27は、無文地に沈線で連弧文渦巻文などを施すもので、北白川式A4類に位置づける土器片である。23、24は『予報』にも掲載されたものであるが、未登録資料となっていた。

なお、図 16-7 と 27 は同一個体と考えられたためか同じ登録番号 (110-002) が付されているが、地文が異なるため、別個体と考えるべきであろう。

図 17 には、磨消縄文など後期以降に降る土器を掲載した。図 17-1 (登録番号 119-006) は、沈線文系の

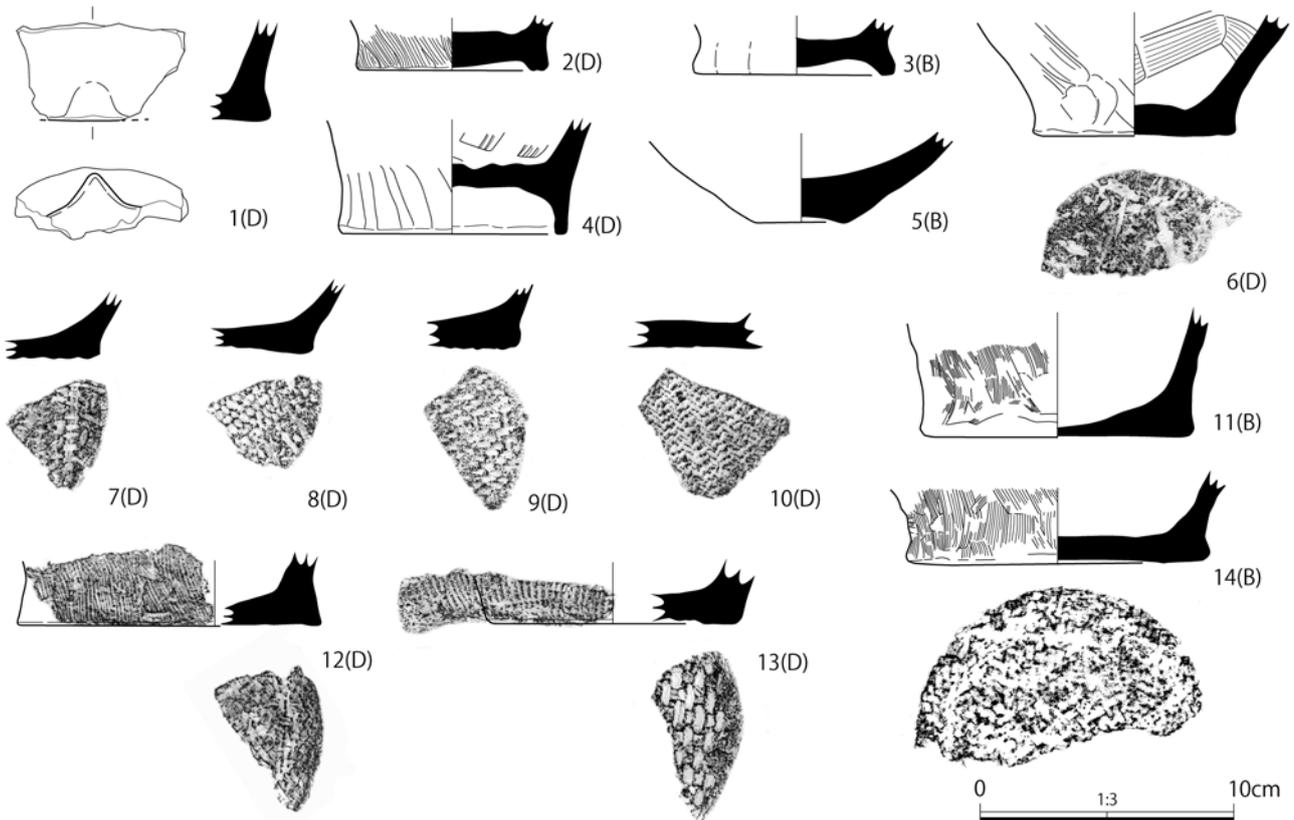


図 20. 縄文土器実測図（その 6）

中津式と考えられる（佐藤 2004）。また、図 17-2～8 は、磨消縄文系の土器片である。図 17-2 は、『予報』にも掲載された土器であるが、未登録資料である。縄文地ではなく、細かい条痕地に沈線による区画が行われ、区画内の条痕文が磨り消されているが、消し方は不完全である。図 17-3～9 は、縄文地に沈線文を施すものである。4（登録番号 119-007）は、縄文地に、棒状工具による刺突と沈線を組み合わせた文様を口縁部外面に施す。口径 17.4 cm の浅鉢であろうか。9 はいわゆる 3 本線がみられ、福田 K II 式と考えられる。

図 17-10～12 は布勢式と考えられるもの、13～16 は、縁帯文土器の一部と考えるものである。

図 17-17 は、後期後葉の元住吉山 I 式（権現山式）段階の口縁部片、図 17-18, 19 は後期末の凹線文土器（宮滝 I 式）段階の破片と考えられる。小論で紹介する土器は、必ずしも時期別の破片数を反映したものではないが、中期後葉～末段階の土器片が多く、後期中葉以降の土器片は細片で、数も少ない。

なお、図 18, 19 には、粗製土器片を、図 20 には底部片を掲載した。登録資料、未登録資料ともに実測可能な破片が多数あるが、紙幅の都合から全点は掲載できないため、なるべくバリエーションを示すために選択した。多くは未登録資料であるが、一部に登録資料が含まれている（表 2 参照）。

図 18-1～3 は、口縁端部付近を薄く仕上げるもので、外面に条痕文を施す。1（登録番号 118-002）のみ、突帯状の隆起部や口縁端部に RL 縄文が施されている。図 18-4 は口縁部が「く」字状に屈曲するものであるが、このような口縁部形態は非常に少ない。

図 18-5 以下は、単純口縁の粗製深鉢で、5～16 および、図 19-2 は、外面が条痕文のもの、17～14 および、図 19-1, 3, 4 は、外面がナデ調整のものである。

図 19-5～20 は胴部片である。外面に縄文を施すもの（5～13）、撚糸文を施すもの（14）、条痕文を施すもの（16～19）、無文で沈線文が施されるもの（20）とバリエーションがある。内面の多くはナデ調整であるが、条痕文のもの、ケズリを施すものもある。

図 20 には底部片の実測図を示す。図 20-1 は五角形底の一部で、鷹島式～船元 I 式のものであろう。

図 20-2～5 は凹み底あるいは、高台状凹み底になる底部片で、中期段階のものと考えられる。特に、5 などは里木 II・III 式に多いタイプであろう。6～14 は平底であるが、底面に網代状圧痕がみられる破片が多い。中期末～後期初頭段階のものと考えられる。

弥生土器 弥生土器片は、IV～VI 層にかけて出土したが、縄文土器片、土師器片に比べて少ない。出土量は「少量」と記述されているので、もともと少なかったのであろう。時期を明らかに示すことができる破片を

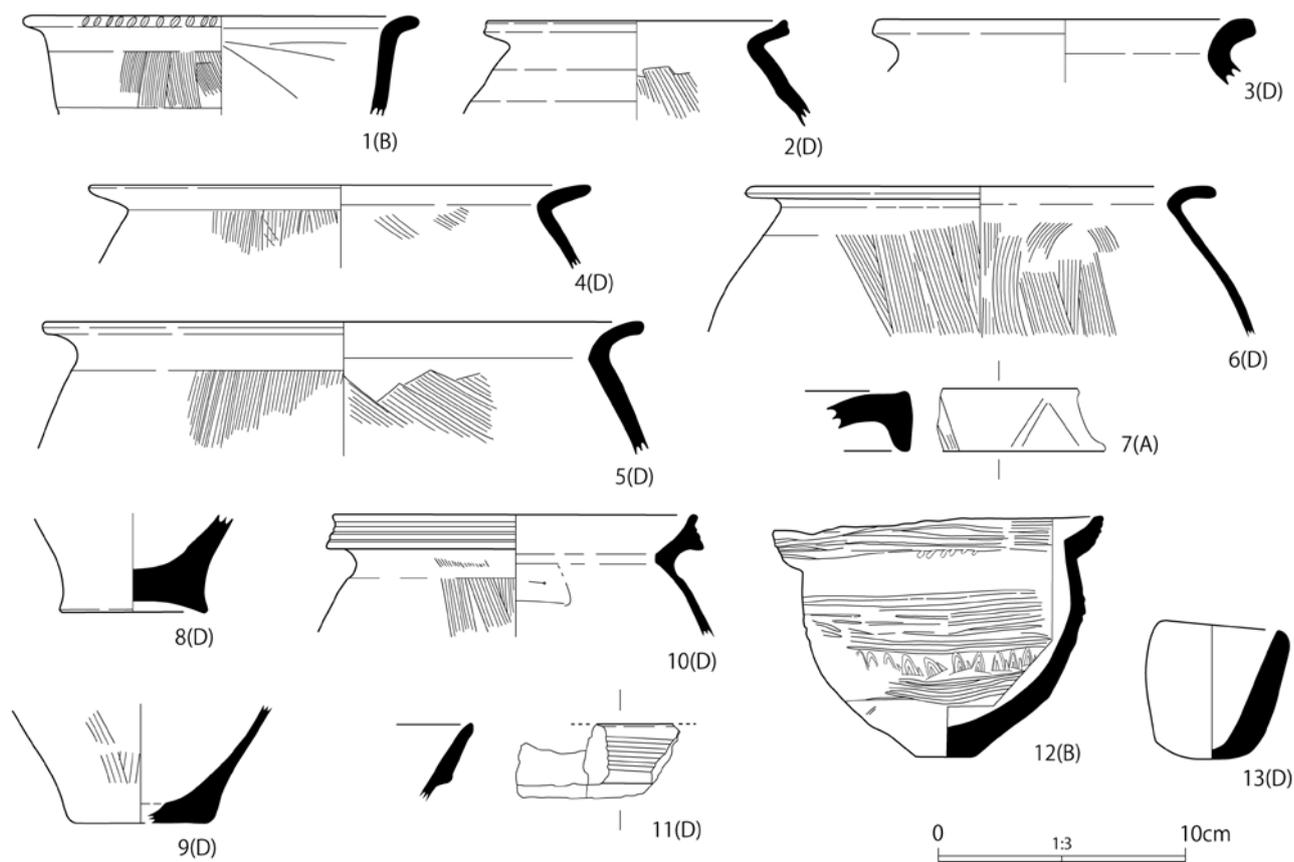


図 21. 弥生土器実測図

10点ほど実測した(図21, 図版14)。

『予報』に掲載された弥生土器は1点のみで、広口壺の口縁部片として図示されたものである(図21-7)。未登録資料中にあった。口径を復元しうる大きさではないが、径25cm程度となる可能性がある。下方に折り曲げた口縁外面に斜格子文の一部と考えられる文様が描かれている。これに類似した土器としては、鳥取市岩吉遺跡SK-66出土例や(谷口他1991)、倉吉市東前遺跡3区出土例などが挙げられ(箕田2012)、中期中葉のⅢ-2段階あたりに位置づけられよう(高尾2008)。同様な時期の土器には、図21-2～6のような甕口縁部片がある他、8,9のような底部片がある。

これより古い時期のものとしては、前期段階の甕片がある(図21-1)。口径15.6cm, 残存高4.0cmを測る。口縁端部に刻み目を施すが、胴部の沈線や段は、残存する範囲では認められない。前期後葉のⅠ-3段階あたりに位置づけられよう。しかし、この土器片は、直浪遺跡から出土したものかどうか定かでない。「139-002」という注記があるが、これは登録台帳にはない番号なのである。また、これまでの調査では弥生時代前期の土器は出土したことがなく、出土土器の中でも孤立した存在である。

弥生時代後期の土器としては甕が多い。図21-12(登

録番号102-004)は、縄文土器と同じ登録番号が付されている。したがって、これも第1次調査で出土した可能性が高い。複合口縁の外面に棒状工具による4条の沈線が施されている。1本1本フリーハンドによる施文で、沈線同士が重なる部分もある。胴部にも同様な沈線が施されており、最大径の部位に7条、底部に近い位置に4条の沈線文が施されている。また、沈線文の間に鋸歯状のスタンプ文が連続して施されているが、施文範囲は1/4周のみである。口縁部形態や櫛状工具による多条沈線文を用いない点からすると、Ⅴ-2段階に位置づけられようか。

図21-10もまた甕口縁部片である(未登録)。口縁端部が幅広に拡張し、その外面に3条の擬凹線文を施している。頸部内面を口縁直下まで削ることから、後期段階に位置づけられよう。口縁端部がやや上方に拡張されることから、Ⅴ-1新段階に位置づけよう。

図21-11もまた甕の複合口縁部片である(未登録)。小片であるが、やや外反する立ち上がり部の外面に櫛状工具による多条平行沈線文が施されており、Ⅴ-3期古段階に一般的な口縁部と見られる。

図21-13は、手づくねのミニチュアと考えられる鉢形土器である(未登録)。完形で、口径4.7cm, 器高5.6cmを測る。紙製のラベルが貼られており、「鳥取図書

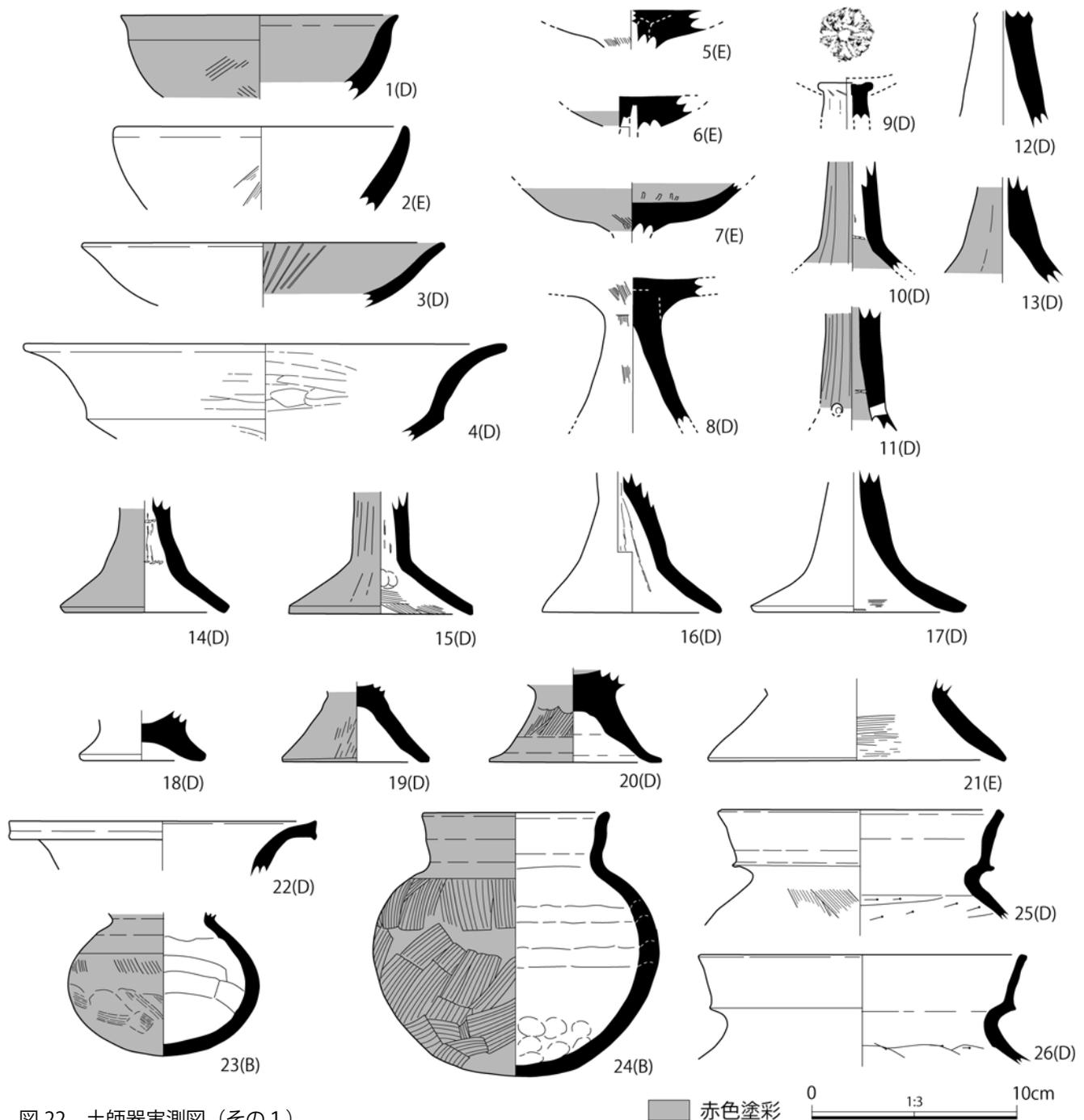


図 22. 土師器実測図 (その 1)

館蔵No. 68 名称：弥生式土器 寄贈者：木山竹治」とある⁷⁾。鳥取図書館は、現在の鳥取県立図書館の前身で、鳥取県立科学博物館設立以前に考古資料などの所蔵・展示施設としても機能していた。そこから移管された遺物と考えられるので、1955年以前のものであろう。弥生式土器とあるが、土師器の可能性もある。

直浪遺跡では、これまでも後期の土器は多く知られており、筆者が行った調査においては、後期後葉V-3期新段階の土器が多く出土している(高田2018)。鳥取県立博物館所蔵の中には典型的なV-3期新段階の土器はみあたらないが、後期前葉、中葉にそれぞれ

遺物が存在することが確認できた。

土師器 土師器は、高坏が多く存在し、甕がそれに次ぎ、壺が若干ある。破片の量自体はどの時期の土器よりも多いと考えられるが、ほとんどが未登録資料である(図22, 23, 図版14~16)。

高坏は、坏部が深い碗形を呈するもの(図22-1, 2)、やや浅い皿形を呈するもの(図22-3)、口縁が外反する有稜のもの(図22-4)がある。破片数からみると、皿形と考えられるものが多く、碗形のもものがそれに次ぎ、有稜のものはごく少ない。皿形や碗形を呈するものは、赤色塗彩されて坏部内面をヘラミガキする古墳

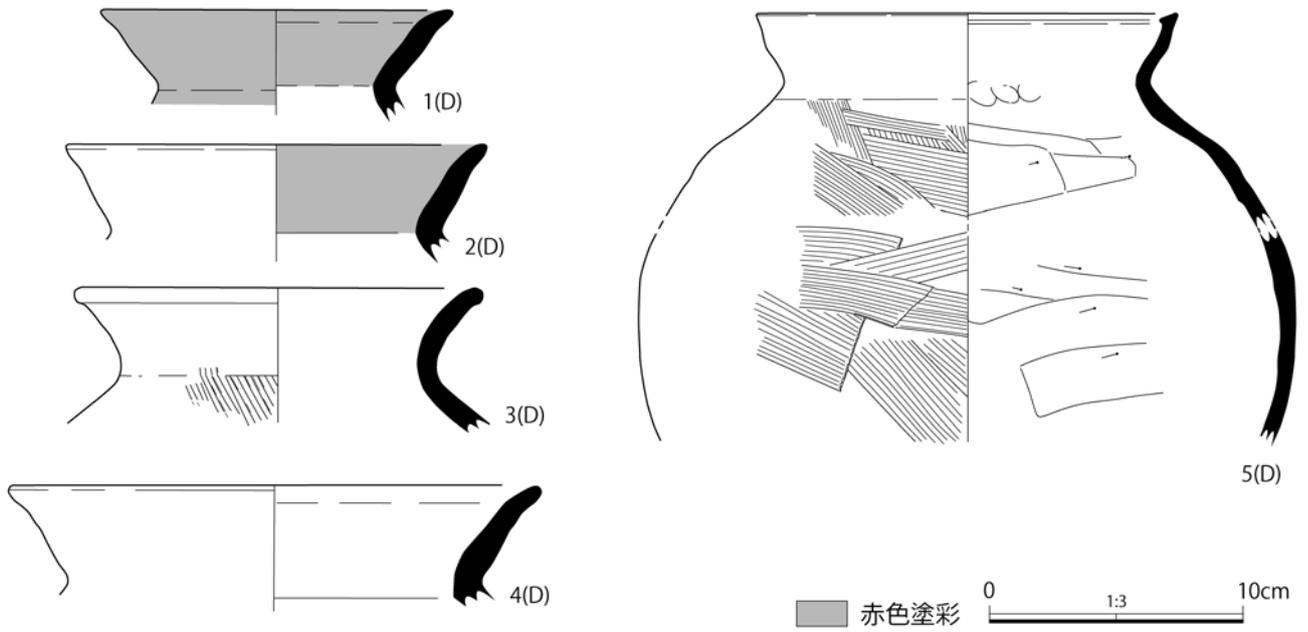


図 23 土師器実測図 (その 2)

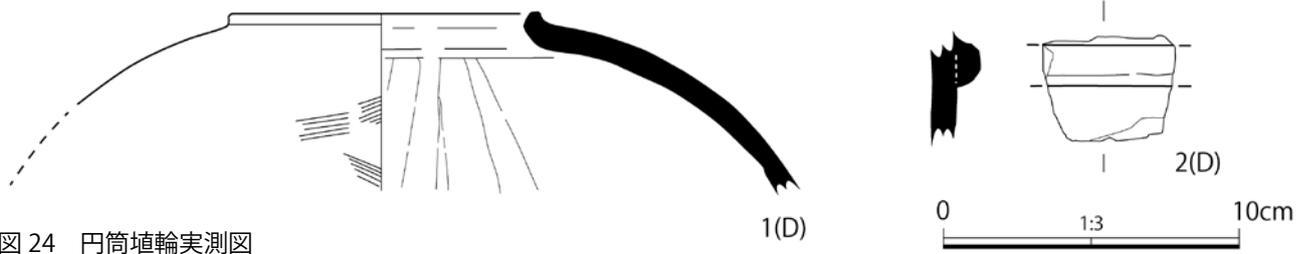


図 24 円筒埴輪実測図

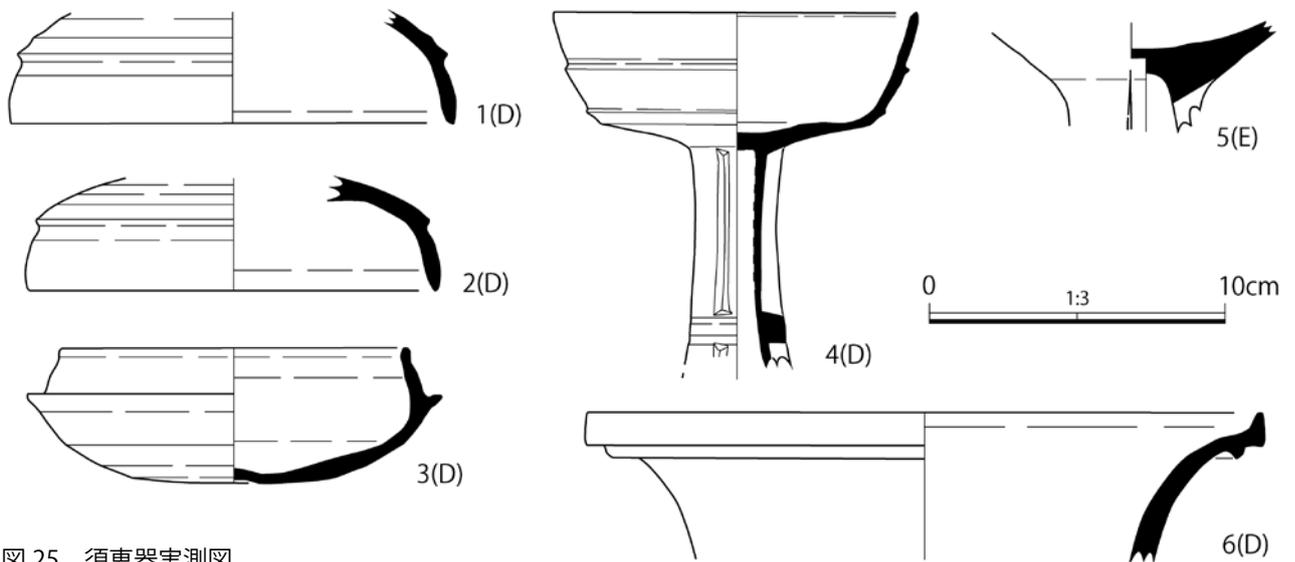


図 25. 須恵器実測図

時代中期に一般化するものである。

図 22-5 ~ 17 は、高坏脚部である。ほとんどは、脚の中心に軸棒を立てて脚部と坏部の接合するもので、脚部上部にその軸棒の痕跡を残すものであるが、8 は三角錐状に作った脚部頂部に坏部を接合するものである。外面は、縦方向のミガキによる面取りを施すものが半数ほどあるが、ナデ調整のみのものもある。脚柱部

内面にはしぼり目が残し、脚が広がる部分はいわゆる蜘蛛の巣状ハケメが施される。脚内面に一本の紐状の圧痕が残るものがあり (10, 11, 14), 軸棒の設置方法と関わりがあると考えられる。

図 22-18 は低脚坏の脚部, 図 22-19 ~ 21 は、高坏というよりも脚付碗と呼ぶべき土器の脚部である。赤色塗彩されたものと、そうでないものの 2 者がある。

図 22-22～24 は、壺である。22 は広口壺の口縁部片と考える破片で、口径 24.9 cm に復元できる。23 (登録番号 140-065) は小型丸底壺の胴部片で、胴部径 9.4 cm である。24 (登録番号 140-007) は、直口壺で、部分的に石膏復元があるがほぼ完形である。口径 9.0 cm, 器高 13.0 cm を測る。外面は粗いハケメ、内面の下半は指頭圧痕をよく残す。上半は粗いナデで粘土継ぎ目が観察できる。23, 24 は登録資料であるが、それぞれ 1955 年 3 月 31 日, 1972 年 6 月 28 日の受け入れとなっており、第 1 次調査出土資料とは見なせない。

図 22-25, 26 は複合口縁をもつ甕の口縁部片である。口縁端部に幅狭い端面をもち、2 次口縁の立ち上がり部の稜線が側方に突出する。谷口恭子の編年に照らすと、弥生時代終末期～古墳時代初頭の因幡 VI -3～VII -1 期に位置づけられよう (谷口 2000)。

一方、図 23-1～4 は、くの字状に外反する口縁をもつ甕である。口縁端部を外方に引き出してやや尖らせるものと、丸く収めるものがある。また、口縁部内面赤色塗彩するものがある。また、図 23-5 は、口縁端部を内側に折り返して傾斜面を付ける布留系口縁の甕である。胴部外面に粗いハケメを施し、内面も粗く削る。

土師器の時期は、高坏からみると古墳時代中期中葉から後葉と考えられるものが多く、脚付き碗、甕からみると後期段階にも降るものもあると考えられるが、前期段階におけるものも少数ながら認められる。

円筒埴輪 円筒埴輪片が 2 点ある (図 24, 図版 17)。いずれも未登録資料であり、出土の経緯は不明である。周辺古墳としては、古墳時代後期末に降る縁山古墳群が知られているが、これらは古墳時代前期段階に遡りうるもので、縁山古墳群以外に砂丘下に埋没した古墳が存在すると考えられる。

図 24-1 は、「直浪 S」とのみ注記があるもので、東方仁史が「因幡型円筒埴輪」と名付けるタイプの口縁部である (東方 2010)。口径 10.4 cm, 残存高 6.1 cm を測る。口縁端部は、わずかに 5 mm 程度上方に立ち上がる。外面はナメ方向のハケメが施されるが、その上からナデ調整を加えるようであり、ハケメは顕著ではない。内面も縦方向のナデを施し、仕上げは丁寧である。外面の一部に黒斑がある。

類例については、因幡の事例を古く考える見解がある一方 (東方前掲, 高橋 2010), 丹後の事例 (丹後型円筒埴輪) を古くする考え方が対立している (北原・福永 2011, 廣瀬 2015)。丹後型円筒埴輪には、加悦谷に分布する口縁部単純系 (A 系) と呼ばれるものと、日本海沿岸部に分布する口縁部立ち上げ系 (B 系) と

呼ばれるものの 2 系統があり、前者が先行して後者が後出するという意見が主流であるが、筆者は、両者ともに円筒埴輪編年の I 期新段階位置づけうる資料が存在すると考えている (高田 2026)。口縁部立ち上げ系 (B 系) の中でも古く位置づけられるものに、与謝野町法王寺古墳例があり (奥村 2013 など), 1 と同様に、口縁部の立ち上がりが非常に小さい点が注目される。直浪遺跡例は、出土古墳が不明な点が残念ながら、型式学的には、今後の検討に不可欠な位置を占めるものとなる。

図 24-2 は、突帯が残る破片である。ハケメなどの調整方法は観察できない。突帯の突出度は低く、断面形が台形を呈する。胎土や焼成は 1 と異なっており、別個体と考えられる。

須恵器 須恵器は未登録資料が 5 点ある (図 25, 図版 17)。坏蓋が 2 点, 坏身が 1 点, 高坏が 2 点, 甕ないし壺口縁部が 1 点である。『予報』には、II～III 層において坏片 2, 3 点, 大壺片が出土したと記述があるので、これらが第 1 次調査出土資料に該当する可能性はある。

図 25-1 は、口径 15.0 cm, 残存高 3.7 cm を測る坏蓋で、2 は口径 13.8 cm, 残存高 3.8 cm の坏蓋である。いずれも天井部と後円部の境界部分に沈線を施し、稜を形成するが、口縁端部は丸く収める。天井部は稜の付近まで回転ヘラケズリを施す。これらの特徴から、陶邑編年の MT85 型式段階に位置づけられよう。

なお、この坏蓋 2 点の内面には、墨書で法華経の一部と考えられる「□須臾説□」、「罽間之眼」等の文字が書かれている (図版 17)。『予報』にこの墨書に関する記述はないので、これらが本当に第 1 次調査で出土したものかどうか定かでない。その上、どのような経緯で古墳時代の須恵器に法華経が書かれたのか不明であり、歴史的に意味があるものかどうかわからない。ただし、直浪遺跡では平安時代のもと考えられる平瓦片が出土しており (文化庁 1983, 高田 2018), 仏教寺院や経塚などと無縁な遺跡というわけではない。

図 25-3 は、口径 11.6 cm, 高さ 4.5 cm を測る坏身である。口縁端部は丸く収め、立ち上がりは高く 1.5 cm, 立ち上がり角度は 25° である。陶邑窯跡群出土資料を元にした植田隆司の分析結果に照らすと (植田 2012), TK10 型式や MT85 型式と類似した形態である。口縁端部形態からすると、坏蓋と同様に MT85 型式段階と考えられる。

無蓋高坏の図 25-4 は、長脚 2 段透かしとなるものである。透かしは上下段ともに 3 方向で、貫通しない点が特徴的である。同様な特徴をもつ高坏は、筆者が

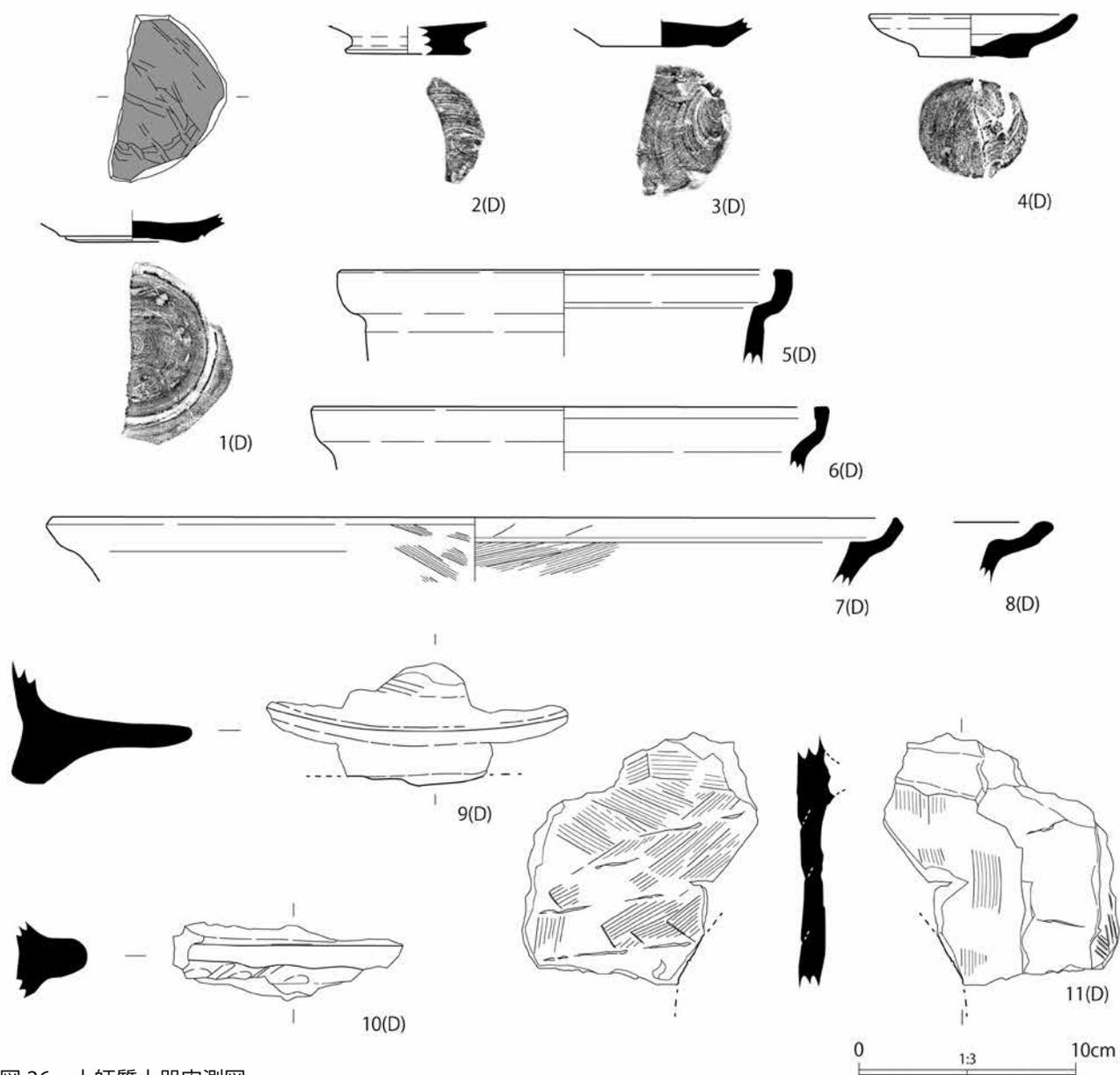


図 26. 土師質土器実測図

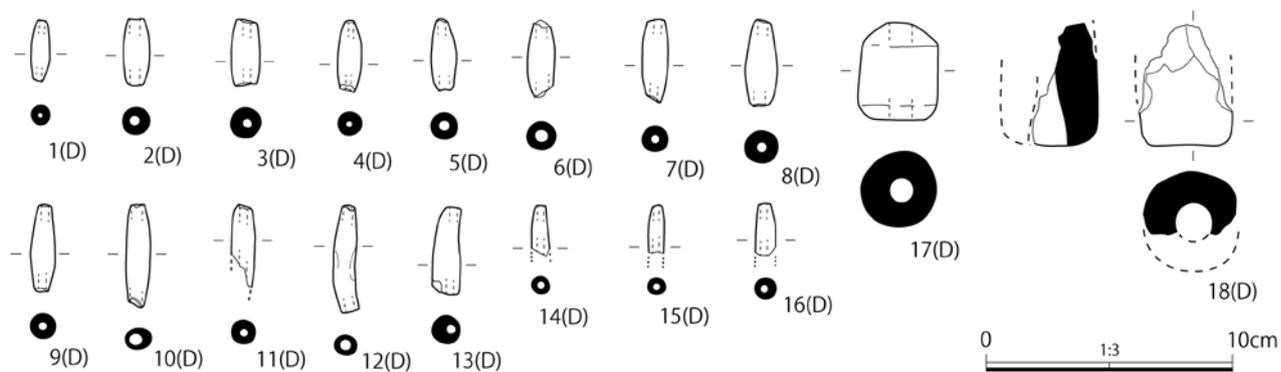


図 27. 土錘実測図

第 8 次調査中に採集して報告した有蓋高坏にもあり (高田 2018), 鳥取県東部において散見される。図 25-5 もまた高坏の坏底部から脚部にかけての破片である。透かしは 2 方向で幅 2mm ほどの切り込みだけ

入れたものである。

図 25-6 は, 壺ないし甕の口縁部である。口径 23.0 cm, 残存高 5.0 cm を測る。

土師質土器 古代以降に位置づけられる土師質土器も

多い(図26, 図版18)。いずれも未登録資料である。

図26-1は、底径5.5cmを測る黒色土器B類の碗である。本来は貼付高台であったと考えられるが、高台は外れてしまっている。碗の形状はよくわからないが、内面のミガキは粗い。11世紀代以降の可能性がある。

この他、糸切り底の皿もしくは坏の破片は多くあるが、比較的残りが良い3点を図化した(図26-2~4)。2は、柱状高台風に底面が広がる。4は口径9.4cm、高さ2.0cmの小型の皿で、大野哲二の分類による皿Aである(大野2016)。これまでに出土している土師器皿と同様に、11世紀代と考えられる。

図26-5~8は、瓦質鍋である。口径20cm程度のもので、40cm程度と大きなものの2種類ある。後者は焼成が甘いものもある。

図26-9~11は、移動式竈の破片である。9, 10はいずれも底部分の破片で、11は底が剥離した痕跡をもつ胴部片である。これ以外にも、移動式竈の裾部片と考えられる被熱痕のある土器片が複数存在する。11は、内外面ともに粗いハケメを施すもので、内面の輪積み痕を残す。古墳時代の属するものの多くは内面をケズリとナデによって仕上げられており、9世紀以降に降る岩吉遺跡出土品は内外面ともにハケメで仕上げられている。この移動式竈も古代以降に降ると考えられる。

管状土錘 18点あり、いずれも未登録資料である(図27, 図版18)。16点は径1cm、長さ3~4cm程度の小型のものであるが、径3cm、長さ4cm程度となるものが2点ある。

小型のものは、1.5~5.8g程度であるが、大きなものは40g以上ある。これまでに同様なサイズの土錘は多数出土しており、時期的にも他の土師器類と近いと考えられよう。

3 既往の調査との対比

第1次調査の成果は、この後に行われた調査成果と合わせて総合的にみると、直浪遺跡の全容をよく示す重要資料と位置づけられる。

まず、縄文時代の遺物についてみると、第2次、第5次、第7次、第8次調査で比較的多く出土しており、とりわけ、第5次調査(谷岡1995)と第7次調査(高田他2015)との関係が興味深い。

第5次調査では、クロボク層の直上に縄文時代中期の遺物のみを含むクロスナ層が確認されており、中期末段階の土器がまとまって出土している。そして、その上層に無遺物層を挟んで、後期初頭(中津式)~後期中葉(布勢式)までの土器が混在する堆積層があった。このことは、クロボク層の形成後にクロスナ層が

発達するが、その時期が中期末段階に降ることを示している。

一方、第7次調査では、クロボク層に密着して船元I式段階の土器片が出土しており、中期末以降の土器はその上層の砂層から出土している。このことからすると、中期前葉段階にはクロボク層が遺構面であった可能性を示している。中期末までの段階で砂層が形成されるが、それは土壌化したクロスナ層であり、遺物自体は大きく数を減らすことなく存在している。これに第5次調査の成果を加味すると、中期前葉、中期末、後期以降で堆積環境が異なり、それぞれの包含層があると考えられよう。

このような土器様相の変化とともに、石器が検討できる点も重要である。出土層位や伴件関係が不明瞭な点は課題であるが、近年増加した良好な資料とともに検討すれば、より詳細な評価が可能となる。

弥生時代に関しては、中期中葉と後期の資料の存在が明確になった。中期はごく短期間の土器しか出土せず、一時的な土地利用を考えうる。一方、後期は前葉~終末期までの人間活動が想定できる。大型砥石の帰属時期は、縄文時代ではなく、弥生時代後期段階に降る可能性が高いと考えられ、この時期に普及する鉄器との関連を考えうる。

古墳時代は、前期後葉、中期後葉、後期後葉の遺物が多くみられた点は、既往の調査成果と大きく異なるが、前期段階に遡りうる円筒埴輪の存在が新しい知見として重要である。砂丘内に埋没した古墳の存在は、長瀬高浜遺跡などでは良く認識されているが、鳥取県東部では十分解明されていない。湯山池を挟んで直浪遺跡の対岸に位置する湯山6号墳に先立つ有力古墳の存在も念頭に置かなければならない。

古代~中世前期の資料も、第4次調査、第8~10次調査出土遺物と対比可能で、大きく異なるところはない。ただし、平瓦の存在とともに、法華経を墨書した須恵器の存在を重視すると、単なる漁村のような遺跡ではないのかもしれない。この点も遺跡を評価する上では念頭に置くべき点であろう。

4 おわりに

1955年に直浪遺跡から出土した遺物について、概要を報告してきた。鳥取県では、2000年代になって増加した考古資料によって、各時代の解像度が高まってきたと言えるものの、再整理・再評価を待っている既存資料も多い。特に、縄文土器については智頭枕田遺跡や、湖山池南岸の高住井出添遺跡などの調査によって資料が充実してきた今日であっても、中期末か

ら後期に至る変化を捉える上で重要な資料になると考
える。

筆者は縄文時代を専門としないため、十分に責を果
たし得ないことを恐れるが、小論が今後の研究の足が
かりを提供できるとすれば、望外の喜びである。

謝 辞

本研究は、JSPS 科研費 23K00930 の助成を受けたも
のである。また、鳥取大学国際乾燥地研究教育機構の
砂丘地保全・活用プロジェクトによる研究資金にも大
いに助けられた。厚く御礼を申し上げる。

さらに、小論をなすにあたって、下記の方々、諸機
関のお世話になった。とりわけ、鳥取県立博物館には
資料借用など多くの便宜を図っていただいたほか、鳥
取県立公文書館には新鳥取県史の調査成果をご提供い
ただいた。菅森義晃氏には石器石材の同定について、
濱田竜彦氏には縄文土器の観察にあたって、種々助言
をいただいた。

小山浩和、酒井雅代、菅森義晃、谷岡陽一、濱田竜
彦、東方あかね、東方仁史、中原計、湯村功、鳥取県
立博物館、鳥取県立公書館県史編さん室、鳥取大学国
際乾燥地研究教育機構

註

1) 本論の図 2 は、『予報』第 4 図 (A), (B) と第 1
表を元にリライトしたものである。平面図に土師器・
須恵器の出土位置として「×」印が書かれ (小論で
は●に変更), 数字が付されているが, この数字に
関しては『予報』に解説がなく, 何を意味するかよ
くわからない。ただし, 「4」が 5 箇所あるため, 本
文の記述と対比すると, 多量の破片があったという
「土師器大甕」の破片の位置であろう。

断面図は, 平面図に記された遺物出土位置との対
比から, トレンチの東西方向の見通し断面図と考え
られる。ただし, トレンチの大きさや遺物の出土位
置は, 平面図と正確に一致しておらず, 土層の表現
方法に意図が汲み取れない部分もある。表土と考え
られる線は, 西側で斜面となっているが, これは調
査地の西側がかつての果樹園造営で削平されて段差
ができていたことを示している。左端の凹みは, 水
路の横断面形であろう。Ⅷ層のクロボク土層は, 東
に向かって下がっているように表現されているが,
破線で描かれており, 確認された地形ではないよう
だ。Ⅵ層には, 「縄文包含層」との注記が付されて
いる。

2) ただし, 石皿は「坂口氏蔵」と注記があって第 1

次調査出土品ではないようだ。また, 拓本や模式図
が示された縄文土器片のうち, 「6 尺」「底」などと
書かれたものは調査における出土品と考えられる
が, 「公」と書かれた 4 点は「公民館」で保管され
ていた既掘品の中から掲載されたものの可能性があ
る。

- 3) 2010 年に当時の考古担当学芸員だった東方仁史氏
が作成したものを提供いただいた。
- 4) 6 月 1 日の受け入れ遺物には打製石斧があるが,
これは, 博物館設立以前に郷土資料の収集場所
であった県立図書館から移管されたもので, より古い
時期に出土したものと考えられる。
- 5) 前半 3 桁の番号の始まりが 1 は縄文土器・弥生土器,
2 は須恵器, 3 は土製品, 4 は石器・石製品 (玉類
を含む), 5 は骨角器・貝製品, 6 は木製品, 7 は金
属製品, 8 は自然遺物, 9 はその他という分類法で
あるようだ。
- 6) 1981 年に文化庁の委託事業として行われた調査を
第 4 次としている。
- 7) 木山竹治氏 (1879-1964) は, 大正時代の『鳥取県
史蹟勝地調査報告』において鳥取県東部地域の調査
委員を務めた人物である。

引用・参考文献

- 赤木三郎・豊島吉則 1965 「鳥取砂丘の構造と起源に
ついて」『地質学雑誌』第 71 巻 838 号, p.357
- 植田隆司 2012 「古墳時代須恵器編年の限界と展望」『龍
谷大学考古学論集』龍谷大学考古学論集刊行会,
pp.129-146
- 大野哲二 2016 「鳥取県東部における平安時代中期か
ら中世前期の土師器について」『下坂本清合遺跡
I』鳥取県教育委員会, pp.151-160
- 大本朋弥 2025 「兵庫県内の磨製石斧」『研究紀要』第
18 号, 兵庫県立考古博物館, pp.17-24
- 奥村清一郎 2013 「法王寺古墳出土の埴輪」『丹後郷土
資料館調査だより』第 2 号, 京都府立丹後郷土資
料館, pp.2-7
- 上條信彦 2007 「石皿と磨石」『縄文時代の考古学』第
5 巻, 同成社, pp.88-101
- 亀井照人・清水真一 1982 「直浪遺跡」『えとのす』第
18 号, 新日本教育図書, pp.35-43
- 北浩明 (編) 2015 『高住井出添遺跡』鳥取県教育委員
会
- 北原梨江・福永伸哉 2011 「丹後型円筒埴輪の 2 系統
とその展開過程」『太爾波考古』第 33 号, 両丹考
古学会, pp. 1 -11

- 高尾浩司 2008 「山陰地方東部における弥生時代中期の土器編年」『地域・文化の考古学 下條信行先生退任記念論文集』下條信行先生退任記念事業会, pp.61-78
- 高田健一(編) 2018 『直浪遺跡の研究』鳥取大学地域学部
- 高田健一 2026 「山陰東部における前方後円墳諸要素の拡充過程」『初期ヤマト政権の地域統合原理の解明と比較考古学的手法によるその人類史的評価』大阪大学人文学研究科, pp.43-71
- 高田健一・中原計 2015 「鳥取市福部町直浪遺跡における考古学的調査」『地域学研究』第12巻第2号, pp.211-226
- 高橋克壽 2010 「山陰の古墳時代前期埴輪の特質」『遠古登攀—遠山昭登君追悼考古学論集』『遠古登攀』刊行会, pp.375-387
- 谷岡陽一 1995 『福部村内遺跡発掘調査報告書』福部村教育委員会
- 谷口恭子 2000 「因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究』XXII, 庄内式土器研究会, pp.89-104
- 谷口恭子・前田均 1991 『岩古遺跡Ⅲ』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団
- 中尾智行(編) 2013 『高住平田遺跡Ⅱ』鳥取県教育委員会
- 幡中光輔 2012 「山陰地域の縄文時代中期末土器—中期末から後期初頭への系譜的検討—」『島根考古学会誌』第29集, pp.5-29
- 東方仁史 2010 「山陰東部における埴輪の導入と展開」『円筒埴輪の導入とその画期』中国四国前方後円墳研究会第13回研究会, pp.71-79
- 廣瀬覚 2015 『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
- 文化庁(編) 1983 『遺跡保存方法の検討—砂地遺跡—』
- 間壁忠彦・間壁葎子 1971 『里木貝塚』倉敷考古館研究集報第7号
- 松田重雄・竹安雄太郎・山名巖・清末忠人 1956 『直浪遺跡発掘調査報告(予報)』福部村教育委員会
- 箕田拓郎(編) 2012 『東前遺跡・茅林遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- 水ノ江和同(編) 2024 『日本列島における縄文磨製石斧の基礎的研究 令和3～5年度科学研究費基盤研究(C)課題番号21K00977』同志社大学文学部文化史学科
- 山本直人 2011 「縄文時代の打欠石錘の用途に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集 史学』57号, pp.19-46
- 柳浦俊一 2017 『山陰地方における縄文文化の研究』雄山閣
- 矢野健一 1993 「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚Ⅰ』愛媛大学法文学部考古学研究室, pp.157-175

表2. 遺物観察表

図番号	登録番号	器種	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石材	注記・備考
4-1	未登録	石鏃	凹基式	2.1	0.7		0.4	黒曜石	
4-2	未登録	石鏃	平基式	2.5	1.8	0.7	2.4	チャート	
4-3	未登録	石鏃	凹基式	2.1	1.9	0.6	1.9	流紋岩	
4-4	未登録	石鏃	平基式	2.2	1.5	0.2	0.6	火山岩	
4-5	未登録	石鏃	平基式	2.4	1.4	0.4	1.1	火山岩	
4-6	未登録	石鏃	有茎式	3.9	1.9	0.6	3.4	黒曜石	
4-7	未登録	石鏃	平基式	2.1	2.6	0.4	1.2	黒曜石	
4-8	未登録	石鏃	凹基式	2.1	1.7	0.5	1.6	石英	
5-1	421-075	磨製石斧	定角式	5.9	2.9	1.3	38	玄武岩	
5-2	未登録	磨製石斧	不明	4.5+	4.5+	2.5	-	溶結凝灰岩	「スクナミ 石斧」
5-3	421-126	磨製石斧	定角式	5.9	3.8	0.9	30	凝灰岩	
5-4	421-124	磨製石斧	定角式	9.2	5.4	2.0	140	火山岩	
5-5	443-007	磨製石斧か	不明	10.3	5.5	2.0+	140	デイサイト	「スクナミ 石包丁」
6-1	416-026	打製石斧	未成品	15.6	7.1	2.0	439	砂岩	「鳥取県岩美郡福部村大字湯山字スクナミ 打製石斧」
6-2	416-027	打製石斧	未成品	11.9	7.1	1.6	219	デイサイト	「昭和二十三年六月二十四日福部村大字湯山字スクナミ」
6-3	416-008	打製石斧	撥形	18.8	11.8	2.6	508	デイサイト	「3」
7-1	435-011	磨石	a類	7.0	6.6	5.9	373	安山岩	
7-2	418-016	磨石	a類	9.5	6.1	5.1	421+	花こう岩	「スクナミ」
7-3	435-013	磨石	a類	12.0	9.3	6.3	971	花こう岩	「スクナミ」
7-4	未登録	磨石	a類	12.2	8.4	5.4	845	花こう岩	「スクナミ」
8-1	435-012	磨石	b類	9.3+	9.9	6.1	837	花こう岩	
8-2	435-014	磨石	b類	11.4	10.5	6.9	1,185	デイサイト	
8-3	435-015	磨石	b類	12.8	10.1	5.0	823	デイサイト	
9-1	418-015	凹石	a類	10.0+	10.2	4.7	760+	花こう岩	
9-2	436-003	凹石	a類	9.9	9.8	4.8	482	安山岩	

図番号	登録番号	器種	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石 材	注記・備考
9-3	418-011	凹石	a類	10.0	9.1	5.2	795	デイサイト	「スクナミ」
9-4	435-002	凹石	b類	11.6	8.8	5.3	754	デイサイト	
9-5	435-006	凹石	b類	11.4	9.0	5.0	671	安山岩	
9-6	418-012	凹石	c類	12.3	9.0	4.0	532	デイサイト	「直ナミ」
9-7	418-014	凹石	c類	9.3	9.0	5.2	543	安山岩	
10-1	411-045	敲石か		14.6	3.5	3.1	273	凝灰岩	
10-2	418-013	不明		10.0+	10.0	6.2	409+	不明	
10-3	435-016	浮子か		8.8+	8.2	4.0	36+	軽石	
11-1	438-009	砥石		18.6	5.0	5.6	997	デイサイト	
11-2	483-008	砥石		18.0+	14.1+	8.0+	1,864+	砂岩	「鳥取縣岩美郡福部村大字湯山字スクナミ 石斧砥石」 438-008の誤記
11-3	438-002	砥石		19.5+	12.9	8.0+	2,000+	花こう岩	
12-1	411-031	石錘	打欠I	3.3	3.2	0.8	11	デイサイト	
12-2	411-036	石錘	打欠I	5.4	4.6	1.3	34	玄武岩	
12-3	411-030	石錘	打欠II	9.3	4.5	1.8	70	花こう岩	
12-4	411-034	石錘	打欠II	6.2	5.5	1.5	73	デイサイト	
12-5	411-029	石錘	打欠II	5.9	5.9	1.8	94	デイサイト	
12-6	411-021	石錘	打欠II	6.1	5.9	1.5	73	花こう岩	
12-7	不明	石錘	打欠III	6.4	6.4	2.1	136	流紋岩	
12-8	不明	石錘	打欠II	5.5	5.8	1.7	58	凝灰岩	
12-9	411-027	石錘	打欠II	7.1	4.2	1.3	58	デイサイト	
12-10	411-028	石錘	打欠I	6.5	4.6	1.0	50	デイサイト	
12-11	411-038	石錘	不明	4.3+	4.8+	1.5+	33+	花こう岩	
12-12	411-039	石錘	不明	5.9	2.8+	1.6	40+	凝灰岩	
12-13	411-052	石錘	打欠II	6.3	5.0	1.5	66	泥岩	
12-14	411-051	石錘	打欠II	7.4	5.5	1.3	81	斑岩	
12-15	411-033	石錘	打欠III	7.9	6.5	1.5	111	デイサイト	
12-16	411-032	石錘	打欠III	7.4	6.2	1.8	127	デイサイト	
12-17	411-035	石錘	不明	5.5+	5.7+	2.2	75+	安山岩	
12-18	411-049	石錘	打欠III	8.7	6.8	2.5	211	花こう岩	「スクナミ 錘石」
12-19	411-022	石錘	打欠III	7.8	8.3	2.4	184	砂岩	「スクナミ 錘石」
12-20	411-050	石錘	有溝	7.1	5.6	3.8	190	デイサイト	
13-1	未登録	石錘	打欠I	4.6	4.6	1.0	27	デイサイト	「スクナミ」
13-2	未登録	石錘	打欠II	6.1	6.7	1.2	68	デイサイト	「スクナミ」
13-3	未登録	石錘	打欠III	6.1	5.5	3.1	146	花こう岩	「スクナミ」
13-4	未登録	石錘	不明	8.0	4.9	1.0	54+	砂岩	「直浪遺跡表面出土 石錘 縄文時代」
13-5	未登録	石錘	不明	5.5+	5.6+	0.7+	23+	凝灰岩質砂岩	「スクナミ 直浪S」
13-6	未登録	石錘	打欠III	7.5	7.3	2.4	173	デイサイト	
13-7	未登録	石錘	大型	10.1	10.6	4.4	691	花こう岩	
14-1	462-013	玉	勾玉	2.8+	1.2	0.9	3.3	流紋岩	
14-2	463-005	玉	管玉	2.4	0.9	-	3.5	凝灰岩	
14-3	463-006	玉	管玉	3.6	0.4	-	0.9	凝灰岩	
14-4	463-006	玉	管玉	3.0	0.5	-	1.2	流紋岩	
14-5	463-006	玉	管玉	2.6	0.5	-	0.8	流紋岩	

図番号	登録番号	器 種	部位	口(底)径	器高	調整・文様	色 調	注記・備考
15-1	未登録	深鉢	口縁	-	5.3+	爪形文, 竹管文	褐灰10YR5/1	船元I式
15-2	未登録	深鉢	口縁	-	6.3+	爪形文, 竹管文, 刺突文: RL縄文, ミガキ	にぶい黄褐10YR5/4	船元I式
15-3	未登録	深鉢	口縁	-	4.6+	RL縄文: RL縄文, ナデ	にぶい黄橙10YR7/2	船元I式
15-4	未登録	深鉢	口縁	-	4.5+	RL縄文, 沈線文: RL縄文, ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	船元I式
15-5	113-001	深鉢	口縁	-	3.0+	爪形文, 刺突文	黄灰2.5Y4/1	船元I式
15-6	未登録	深鉢	口縁	-	3.2+	沈線文, 刺突文: RL縄文	黄灰2.5Y4/1	船元I式
15-7	未登録	深鉢	口縁	-	9.4+	爪形文, RL縄文	灰黄2.5Y6/2	船元I式
15-8	113-002	深鉢	口縁	-	9.4+	半裁竹管文	灰黄2.5Y7/2	船元I式
15-9	未登録	深鉢	胴部	-	5.7+	RL縄文, 半裁竹管文	黄灰2.5Y5/1	船元I式
16-1	未登録		口縁	-	3.8+	沈線文	にぶい黄橙10YR6/3	
16-2	未登録		口縁	-	3.0+	沈線文	橙5YR6/6	
16-3	未登録	深鉢	胴部	-	4.0+	半裁竹管平行沈線	灰黄褐10YR6/2	船元III式
16-4	118-003	深鉢	口縁	-	2.5+	撚糸文, 半裁竹管文	暗灰黄2.5Y5/2	里木II・III式

図番号	登録番号	器種	部位	口(底)径	器高	調整・文様	色調	注記・備考
16-5	110-015	深鉢	口縁	33.9	8.5+	擦糸文	にぶい黄橙10YR7/2	里木Ⅱ・Ⅲ式
16-6	未登録		口縁	-	4.2+	擦糸文		暗灰黄2.5Y5/2
16-7	110-002	深鉢	胴部	-	5.7+	擦糸文, 波状沈線	浅黄2.5Y7/3	里木Ⅱ・Ⅲ式
16-8	未登録		口縁	-	2.8+	矢羽根状刺突文	褐灰10YR6/1	中期末
16-9	未登録		口縁	-	3.6+	矢羽根状刺突文	にぶい黄褐10YR5/4	中期末
16-10	未登録		口縁	-	3.3+	RL縄文, 平行沈線	灰白10YR8/1	中期末
16-11	未登録		口縁	-	6.1+	RL縄文, 平行沈線	褐灰10YR5/1	中期末
16-12	110-007・008		口縁	18.0	3.8+	LR縄文, 沈線文: ナデ	にぶい褐7.5YR6/3	中期末
16-13	未登録	深鉢	口縁	-	5.7+	LR縄文, 沈線内刺突文	黄灰2.5Y4/1	16-14と同一個体, 中期末
16-14	110-005	深鉢	口縁	-	3.6+	LR縄文, 沈線内刺突文	黄灰2.5Y4/1	16-13と同一個体, 中期末
16-15	110-003	深鉢	口縁	-	7.7+	押引沈線, 連弧文	褐灰10YR4/1	中期末
16-16	未登録	深鉢	口縁	-	6.6+	押引沈線, 沈線内刺突文	灰黄褐10YR6/2	中期末
16-17	未登録	深鉢	口縁	-	3.0+	押引沈線, 刺突文	灰黄2.5Y6/2	中期末
16-18	未登録	深鉢	口縁	-	2.2+	沈線内刺突文	暗灰黄2.5Y5/2	中期末
16-19	未登録	深鉢	胴部	-	2.9+	沈線内刺突文	黄褐2.5Y5/3	中期末
16-20	未登録	深鉢	口縁	-	3.7+	連弧文	灰黄褐10YR5/2	中期末
16-21	未登録	深鉢	口縁	-	3.0+	沈線文	明黄褐10YR6/6	中期末
16-22	未登録	深鉢	口縁	-	3.0+	連弧文	明褐7.5YR5/6	中期末
16-23	未登録	深鉢	胴部	-	3.0+	渦状文	灰黄褐10YR5/2	中期末
16-24	未登録	深鉢	胴部	-	4.5+	渦状文	灰黄褐10YR5/2	中期末
16-25	未登録	深鉢	胴部	-	3.8+	渦状文	褐灰10YR6/1	中期末
16-26	未登録	深鉢	胴部	-	6.2+	渦状文	褐灰10YR6/1	中期末
16-27	110-002	深鉢	胴部	-	4.8+	RL縄文, 沈線文	黄灰2.5Y4/1	中期末
17-1	119-006	深鉢	口縁	-	5.6+	沈線文	黄灰2.5Y6/1	中津式
17-2	未登録	深鉢	口縁	20.0	7.6+	条痕, 沈線文	にぶい黄橙10YR7/3	中津式
17-3	未登録	深鉢	口縁	-	6.0+	磨消縄文LR	灰黄褐10YR6/2	中津式
17-4	119-007		口縁	17.4	2.7+	刺突文, 沈線文	にぶい黄橙10YR6/4	中津式か
17-5	未登録	深鉢	口縁	-	2.5+	磨消縄文RL	にぶい橙7.5YR6/4	中津~福田KⅡ式
17-6	未登録	深鉢	口縁	-	2.7+	磨消縄文RL	灰黄褐10YR6/2	中津~福田KⅡ式
17-7	未登録	深鉢	口縁	-	2.5+	磨消縄文RL	黄灰2.5Y5/1	中津~福田KⅡ式
17-8	未登録	深鉢	口縁	-	2.2+	磨消縄文LR	灰黄褐10YR5/2	中津~福田KⅡ式
17-9	未登録	深鉢	口縁	-	2.8+	磨消縄文LR	褐灰10YR4/1	中津~福田KⅡ式
17-10	117-018	深鉢	口縁	-	4.5+	LR縄文	灰黄2.5Y6/2	布勢式
17-11	110-013	浅鉢か	口縁	-	4.2+	RL縄文	明褐7.5YR5/6	布勢式
17-12	未登録	深鉢	口縁	-	2.7+		褐灰10YR6/1	布勢式
17-13	未登録	深鉢	胴部	-	3.0+		褐灰10YR5/1	布勢式
17-14	未登録	深鉢	胴部	-	5.5+		灰黄褐10YR5/2	布勢式
17-15	未登録	深鉢	胴部	-	2.3+		にぶい褐7.5YR5/4	布勢式
17-16	未登録	深鉢	口縁	-	4.2+		褐7.5YR4/6	布勢式
17-17	未登録	深鉢	口縁	-	3.6+		褐灰10YR4/1	元住山Ⅰ(権現山)式
17-18	未登録	深鉢	口縁	-	1.5+		褐灰10YR4/1	宮滝1式
17-19	未登録	深鉢	口縁	-	3.8+		暗灰黄2.5Y4/2	宮滝1式
18-1	118-002	深鉢	口縁	-	5.3+		にぶい橙7.5YR6/4	
18-2	未登録	深鉢	口縁	-	4.0+		にぶい黄橙10YR7/2	
18-3	未登録	深鉢	口縁	-	5.2+		灰黄2.5Y7/2	
18-4	未登録	深鉢	口縁	-	5.2+		灰黄2.5Y7/2	
18-5	未登録	深鉢	口縁	-	4.5+		にぶい橙7.5YR6/4	
18-6	未登録	深鉢	口縁	-	4.9+		暗灰黄2.5Y5/2	
18-7	未登録	深鉢	口縁	-	3.3+		にぶい黄橙10YR6/3	
18-8	未登録	深鉢	口縁	-	4.3+		黄灰2.5Y5/1	
18-9	未登録	深鉢	口縁	-	5.1+		暗灰黄2.5Y5/2	
18-10	未登録	深鉢	口縁	-	5.1+		黄灰2.5Y5/1	
18-11	未登録	深鉢	口縁	-	3.5+		灰白10YR7/1	
18-12	未登録	深鉢	口縁	-	4.4+		黄灰2.5Y5/1	
18-13	未登録	深鉢	口縁	-	3.4+		灰黄2.5Y6/2	
18-14	119-004	深鉢	口縁	-	6.9+		黄灰2.5Y4/1	
18-15	112-001	深鉢	口縁	-	10.9+		浅黄2.5Y7/4	
18-16	112-002	深鉢	口縁	-	7.4+		灰黄褐10YR6/2	
18-17	未登録	深鉢	口縁	-	3.1+		灰黄2.5Y6/2	
18-18	未登録	深鉢	口縁	-	5.7+		黄灰2.5Y5/1	

図番号	登録番号	器種	部位	口(底)径	器高	調整・文様	色調	注記・備考
18-19	未登録	深鉢	口縁	-	7.2+		暗灰黄2.5Y5/2	
18-20	未登録	深鉢	口縁	-	7.4+		灰黄2.5Y7/2	
18-21	未登録	深鉢	口縁	-	6.2+		灰黄2.5Y6/2	
18-22	未登録	深鉢	口縁	-	5.6+		黄灰2.5Y5/1	
18-23	未登録	深鉢	口縁	-	7.8+		灰黄褐10YR5/2	
18-24	119-005	深鉢	口縁	-	7.4+		灰黄2.5Y6/2	
19-1	未登録	深鉢	口縁	-	9.7+	ナデ：ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	
19-2	未登録	深鉢	口縁	-	9.2+	条痕：条痕	にぶい黄2.5Y6/3	
19-3	未登録	深鉢	口縁	19.0	10.3+	ナデ：ナデ	灰黄2.5Y7/2	
19-4	119-002	深鉢	口縁	18.2	11.8+	ナデ：ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	
19-5	110-009	深鉢	胴部	-	3.8+	縄文：不明	橙5YR6/6	
19-6	110-014	深鉢	胴部	-	3.4+	LR縄文：ミガキ	灰黄褐10YR5/2	
19-7	未登録	深鉢	胴部	-	3.0+	RL縄文：条痕	にぶい黄橙10YR7/4	
19-8	未登録	深鉢	胴部	-	3.2+	RL縄文：不明	にぶい黄橙10YR7/3	
19-9	未登録	深鉢	胴部	-	6.4+	LR縄文，ナデ：ケズリ	橙5YR6/6	
19-10	未登録	深鉢	胴部	-	4.3+	LR縄文：不明	黒褐7.5YR3/1	
19-11	未登録	深鉢	胴部	-	7.8+	RL縄文，ナデ：不明	褐灰5YR4/1	
19-12	未登録	深鉢	胴部	-	5.7+	RL縄文：ミガキ	灰黄褐10YR4/2	
19-13	未登録	深鉢	胴部	-	5.1+	RL縄文，条痕：条痕	灰黄2.5Y7/2	
19-14	未登録	深鉢	胴部	-	4.1+	擦糸文：不明	橙10YR8/4	
19-15	未登録	深鉢	胴部	-	4.5+	条痕文：ナデ	にぶい黄褐10YR5/3	
19-16	未登録	深鉢	胴部	-	6.0+	条痕文：条痕	にぶい黄橙10YR7/2	
19-17	112-004	深鉢	胴部	-	4.5+	条痕文：ミガキ	にぶい黄褐10YR5/4	
19-18	112-003	深鉢	胴部	-	5.8+	条痕文：ミガキ	にぶい黄褐10YR6/4	
19-19	未登録	深鉢	胴部	-	5.1+	条痕文：ナデ	黒褐10YR3/1	
19-20	未登録	深鉢	胴部	-	8.5+	沈線，ナデ：不明	にぶい黄褐10YR5/3	
20-1	未登録	深鉢	底部	-	3.7+		灰黄褐10YR4/2	鷹島式～船元Ⅰ式
20-2	未登録	深鉢	底部	7.6	2.0+	条痕：ナデ	にぶい赤褐5/4	
20-3	101-002	深鉢	底部	7.8	2.2+		にぶい黄褐10YR6/4	
20-4	未登録	深鉢	底部	9.0	9.0+	ナデ：条痕	橙5YR6/8	網代圧痕
20-5	未登録	深鉢	底部	3.6	3.6+		灰5Y5/1	里木Ⅱ式
20-6	未登録	深鉢	底部	8.0	4.4+	条痕：ナデ	にぶい橙6/4	
20-7	未登録	深鉢	底部	-	2.4+		にぶい橙6/4	網代圧痕
20-8	未登録	深鉢	底部	-	2.6+		明褐灰7.5YR7/2	網代圧痕
20-9	未登録	深鉢	底部	-	2.5+		にぶい黄褐10YR5/4	網代圧痕
20-10	未登録	深鉢	底部	-	1.4+		にぶい橙6/4	網代圧痕
20-11	101-005	深鉢	底部	10.5	4.9+	条痕：ナデ	灰黄2.5Y7/2	
20-12	未登録	深鉢	底部	12.0	2.8+	条痕：ナデ	明黄褐10YR6/6	網代圧痕
20-13	未登録	深鉢	底部	9.8	1.8+	条痕：ナデ	灰白10YR8/2	網代圧痕
20-14	101-004	深鉢	底部	11.4	3.5+	条痕：ナデ	灰黄2.5Y7/2	網代圧痕
21-1	139-002	甕	口縁	15.6	4.0+	刻み目，ハケメ：ナデ	明黄褐10YR7/6	
21-2	未登録	甕	口縁	-	3.8+	ナデ：ハケメ	灰白2.5Y7/1	
21-3	未登録	甕	口縁	-	2.1+	ナデ：ナデ	灰白10YR8/2	
21-4	未登録	甕	口縁	20.0	3.4+	ハケメ：ハケメ	灰白10YR8/2	
21-5	未登録	甕	口縁	-	5.3+	ハケメ：ハケメ	にぶい黄橙10YR7/2	
21-6	未登録	甕	口縁	18.6	5.9+	ハケメ：ハケメ	灰白10YR8/2	
21-7	未登録	広口壺	口縁	-	1.8+	斜格子文	にぶい黄橙10YR7/2	
21-8	未登録	甕	底部	-	4.0+		灰黄褐10YR6/2	
21-9	未登録	甕	底部	-	4.2+	ミガキ	褐灰10YR4/1	
21-10	未登録	甕	口縁	14.4	4.8+	擬凹線，ハケメ：ケズリ	明赤褐5YR5/6	
21-11	未登録	甕	口縁	-	3.0+	擬凹線	にぶい橙7.5YR6/4	
21-12	102-004	甕	完形	13.3	9.7	擬凹線，スタンプ文	灰褐7.5YR5/2	
21-13	未登録	ミニチュア	完形	4.7	5.6		にぶい黄橙10YR7/3	
22-1	未登録	高坏	口縁	13.4	4.1+	ハケメ：ミガキ	明赤褐2.5YR5/6	
22-2	未登録	高坏	口縁	14.0	4.0+	ハケメ	にぶい黄橙10YR7/3	
22-3	未登録	高坏	口縁	17.4	3.0+	ナデ：ミガキ	橙2.5YR6/6	
22-4	未登録	高坏	口縁	25.8	4.8+	ミガキ：ミガキ	にぶい橙7.5YR7/4	
22-5	未登録	高坏	坏部	v	1.8+	ハケメ：ミガキ	明赤褐2.5YR5/8	
22-6	未登録	高坏	坏部	-	1.5+	ハケメ：ミガキ	橙5YR6/6	
22-7	未登録	高坏	坏部	-	2.4+	ハケメ：ミガキ	橙5YR6/6	
22-8	未登録	高坏	脚部	-	7.0+	ハケメ：ミガキ	明赤褐2.5YR5/6	
22-9	未登録	高坏	脚部	-	1.7+	ミガキ	明赤褐2.5YR5/6	
22-10	未登録	高坏	脚部	-	5.0+	ミガキ	明赤褐2.5YR5/8	

図番号	登録番号	器種	部位	口(底)径	器高	調整・文様	色調	注記・備考
22-11	未登録	高坏	脚部	-	5.6+	ミガキ	明赤褐5YR5/8	
22-12	未登録	高坏	脚部	-	5.6+		明赤褐5YR5/6	
22-13	未登録	高坏	脚部	-	4.7+	ミガキ	赤褐2.5YR4/8	
22-14	未登録	高坏	脚部	7.6	5.5+	ミガキ	明赤褐2.5YR4/6	
22-15	未登録	高坏	脚部	9.0	6.0+	ミガキ：ハケメ	明赤褐2.5YR5/8	
22-16	未登録	高坏	脚部	8.8	6.8+		浅黄橙10YR8/3	
22-17	未登録	高坏	脚部	10.1	6.4+	ミガキ：ハケメ	明赤褐5YR5/6	
22-18	未登録	低脚坏	脚部	5.8	2.0+		にぶい黄橙10YR7/3	
22-19	未登録	脚付碗	脚部	7.2	3.9+	ハケメ	赤褐5YR4/6	
22-20	未登録	脚付碗	脚部	8.4	4.4+	ハケメ	明赤褐2.5YR5/6	
22-21	未登録	脚付碗	脚部	14.4	3.5+	：ハケメ	にぶい黄橙10YR6/3	
22-22	未登録	広口壺	口縁	14.9	1.7+		にぶい橙7.5YR7/3	
22-23	140-065	小型丸底壺	胴部	-	7.1+	ハケメ：ナデ	赤10YR5/6	
22-24	140-007	直口壺	完形	9.0	13.0	ハケメ：ナデ	にぶい赤褐2.5YR4/4	
22-25	未登録	甕	口縁	13.4	5.3+	ハケメ：ケズリ	灰白10YR8/2	
22-26	未登録	甕	口縁	15.4	5.2+	ハケメ：ケズリ	にぶい黄橙10YR7/2	
23-1	未登録	甕	口縁	13.6	3.7+	ナデ：ナデ	明赤褐5YR5/6	
23-2	未登録	甕	口縁	16.6	4.6+	ナデ：ナデ	黒褐7.5YR3/1	
23-3	未登録	甕	口縁	15.4	5.5+	ナデ，ハケメ：ナデ	明赤褐5YR5/6	
23-4	未登録	甕	口縁	20.6	5.0+	ナデ：ナデ	にぶい黄褐10YR7/2	
23-5	未登録	甕	上半	16.4	17.0+	ハケメ：ナデ，ケズリ	橙5YR6/6	
24-1	未登録	円筒埴輪	口縁	10.4	6.1+	ハケメ：ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	壺円筒埴輪
24-2	未登録	円筒埴輪	突帯	-	3.6+		にぶい黄橙10YR7/4	
25-1	未登録	坏蓋	口縁	15.0	3.7+	回転ケズリ：ナデ	黄灰2.5Y5/1	MT85型式段階，「須臾説」
25-2	未登録	坏蓋	口縁	13.8	3.8+	回転ケズリ：ナデ	灰7.5Y5/1	MT85型式段階，「経，(世)間之眼」
25-3	未登録	坏身		11.6	4.5	回転ケズリ：ナデ	灰N4/	MT85型式段階
25-4	未登録	高坏	坏+脚	12.2	11.8+	ナデ，3方向透かし	黒N2/	TK43型式段階
25-5	未登録	高坏	坏部	-	3.8+	ナデ	灰7.5Y4/1	
25-6	未登録	甕	口縁	23.0	5.0+	ナデ	灰N4/	
26-1	未登録	碗	底部	5.5	1.0+	ナデ：ミガキ	にぶい黄橙10YR7/3：黒10YR1.7/1	黒色土器B類
26-2	未登録	皿	底部	5.8	1.3+	回転糸切り	にぶい黄褐10YR7/2	
26-3	未登録	皿	底部	6.0	0.8+	回転糸切り	橙7.5YR7/6	
26-4	未登録	皿	完形	9.4	2.0	回転糸切り	灰黄2.5Y7/2	
26-5	未登録	土鍋	口縁	20.6	4.4+		暗灰N3/	
26-6	未登録	土鍋	口縁	24.4	2.9+		灰5Y4/1	
26-7	未登録	土鍋	口縁	39.0	3.0+	ハケメ：ハケメ	明赤褐5YR5/6	
26-8	未登録	土鍋	口縁	-	2.5+		黒2.5Y2/1	
26-9	未登録	移動式竈	庇	-	5.5+	ナデ：ナデ	暗褐10YR3/3	
26-10	未登録	移動式竈	庇	-	3.5+	ナデ：ナデ	浅黄橙10YR8/3	
26-11	未登録	移動式竈	焚口	-	11.9+	ハケメ：ハケメ	にぶい黄橙10YR6/4	庇剥がれ

図番号	登録番号	器種	部位	径	長さ	孔径	重量	色調	備考
27-1	未登録	管状土錘		0.8	2.4	0.2	1.5	橙7.5YR6/6	
27-2	未登録	管状土錘		1.1	3.7	0.4	3.2	黄灰2.5Y5/1	
27-3	未登録	管状土錘		1.2	2.7	0.3	4.1	橙7.5YR7/6	
27-4	未登録	管状土錘		1.0	2.9+	0.2	2.6+	にぶい黄橙10YR7/4	
27-5	未登録	管状土錘		1.0	2.9	0.4	2.8	褐灰10YR5/1	
27-6	未登録	管状土錘		1.1	3.2	0.5	3.6	黄灰2.5Y4/1	
27-7	未登録	管状土錘		1.0	3.4	0.4	3.3	にぶい黄橙10YR5/4	
27-8	未登録	管状土錘		1.3	3.5	0.4	5.8	黄灰2.5Y5/1	
27-9	未登録	管状土錘		1.0	3.6	0.3	2.7	にぶい黄褐5YR5/4	
27-10	未登録	管状土錘		1.0	4.2	0.4	2.8	浅黄橙10YR8/3	
27-11	未登録	管状土錘		0.9	3.4+	0.3	2.2+	灰黄2.5Y5/1	
27-12	未登録	管状土錘		0.9	4.4	0.4	3.4	明黄褐10YR7/6	
27-13	未登録	管状土錘		1.1	3.5+	0.3	4.6+	灰白5Y8/1	
27-14	未登録	管状土錘		0.7	2.0+	0.3	0.8+	淡黄2.5Y8/3	
27-15	未登録	管状土錘		0.6	2.0+	0.3	0.7+	浅黄2.5Y7/3	
27-16	未登録	管状土錘		0.9	2.1+	0.3	1.1+	灰黄褐10YR5/2	
27-17	未登録	管状土錘		3.2	3.9	0.9	43.3	灰白2.5Y8/2	
27-18	未登録	管状土錘		4.2	4.6+	1.0	31.3+	灰黄褐2.5Y6/2	





図 6-1

図 6-2

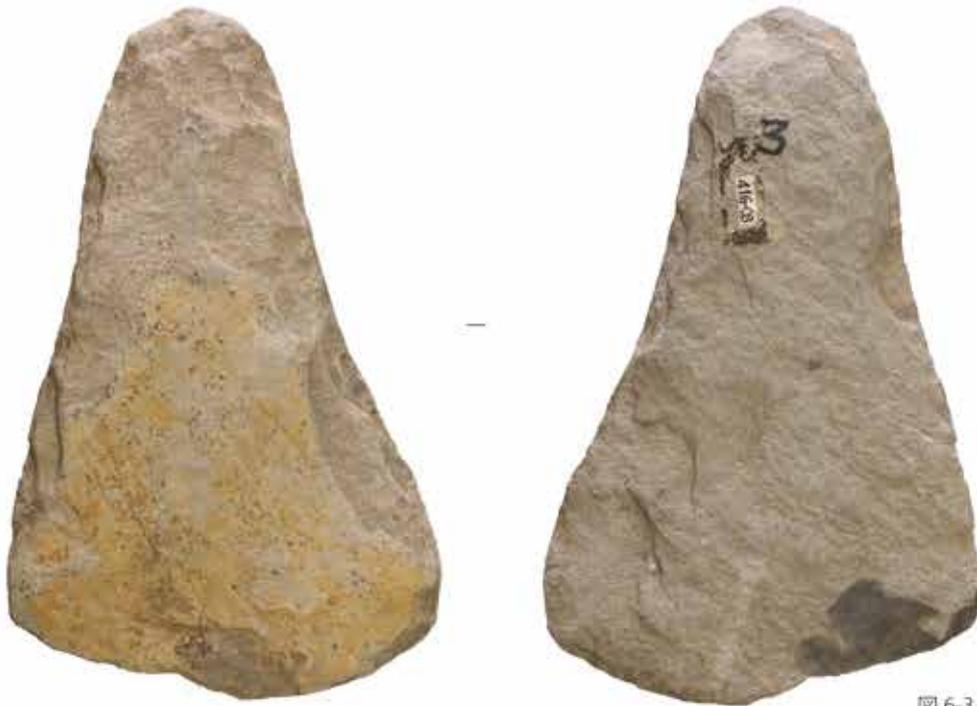


図 6-3

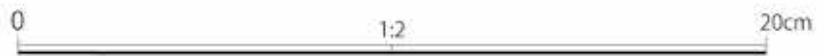




図 7-1



図 7-2



図 7-3



図 7-4

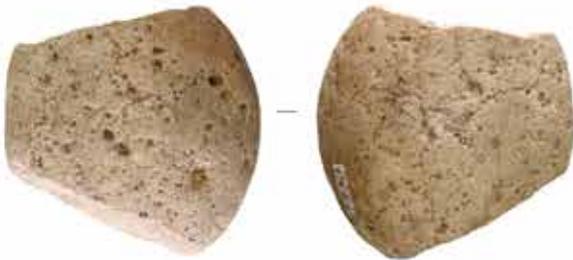


図 8-1



図 8-2



図 8-3



図版
4



図 9-1



図 9-2



図 9-3



図 9-4



図 9-5



図 9-6



図 9-7



図 10-1

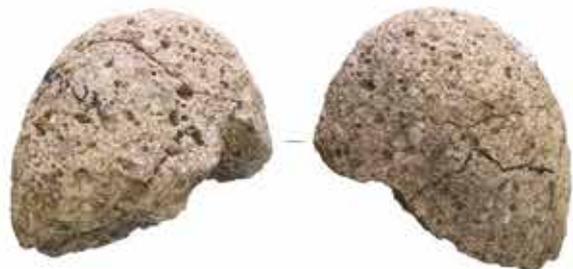


図 10-2

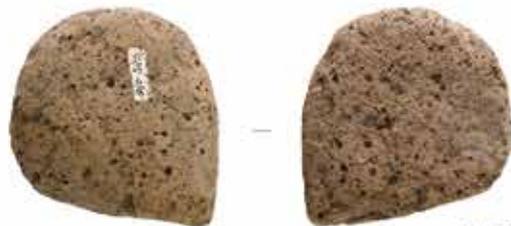


図 10-3



図 11-1



図 11-2



図 11-3







図 13-1



図 13-2



図 13-3



図 13-4



図 13-5



図 13-6



図 13-7



図 14-1



図 14-2



図 14-3

図 14-4

図 14-5









図 17-1



図 17-2



図 17-3



図 17-4



図 17-5



図 17-6



図 17-7



図 17-8



図 17-9



図 17-10



図 17-11



図 17-12



図 17-13



図 17-14



図 17-15



図 17-16



図 17-17



図 17-18



図 17-19













図 22-7



図 22-8



図 22-9



図 22-10



図 22-14



図 22-11



図 22-12



図 22-13



図 22-15



図 22-16



図 22-17



図 22-18



図 22-19



図 22-21



図 22-20





図 22-22



図 22-25



図 22-26



図 22-23



図 23-1



図 22-24



図 23-2



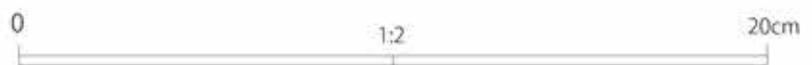
図 23-3



図 23-4



図 23-5





図版
18



図 26-1

図 26-2

図 26-3

図 26-4



図 26-5

図 26-6



図 26-7

図 26-8



図 26-9

図 26-10

0 20cm 図 26-9~11 比 1:4



図 26-11

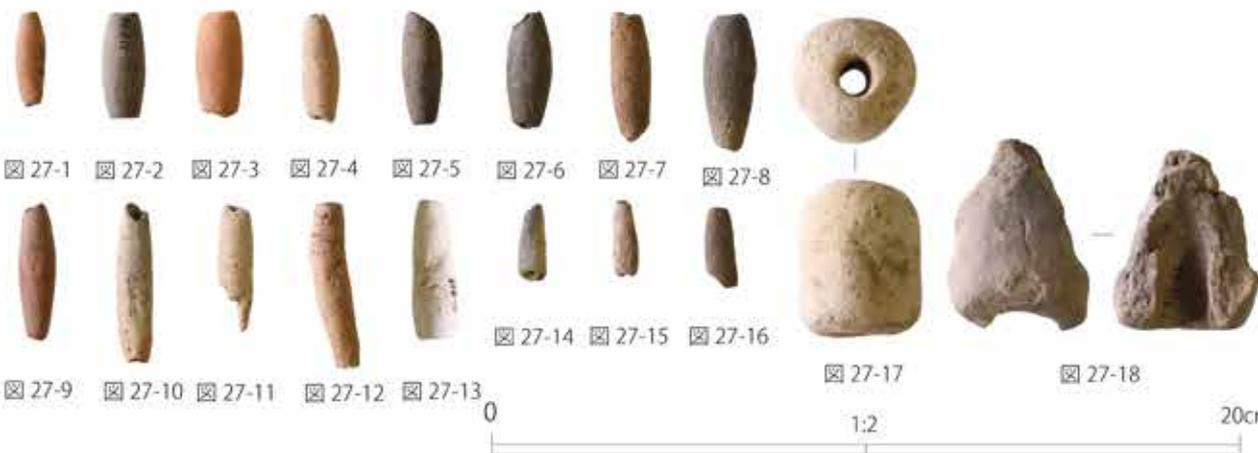


図 27-1

図 27-2

図 27-3

図 27-4

図 27-5

図 27-6

図 27-7

図 27-8

図 27-8

図 27-9

図 27-10

図 27-11

図 27-12

図 27-13

図 27-14

図 27-15

図 27-16

図 27-16

図 27-17

図 27-18

0 1:2 20cm